三重県埋蔵文化財調査報告２３８－２

東 前 遺 跡 発 掘 調 査 報 告

２００４(平成１６)年３月

三 重 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

現代社会において、車は生活の中で重要な位置を占め、車のない生活が考えられないようになってきています。全国に整備が進められている高速道路網は、特に産業や観光に寄与することにおいて、常に地域周辺住民の関心の的であり願いでもあります。

近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）は、尾鷲市から多気郡勢和村までを結ぶ高速道路で、勢和村で近畿自動車道（伊勢自動車道）に接続することにより、東紀州地域と近畿・中京経済圏を結ぶ幹線道路として建設が進められています。

三重県教育委員会では、建設予定地内の埋蔵文化財の保護とその取り扱いについて、日本道路公団をはじめ関係機関と協議を重ねてきました。その結果、現状保存が困難な遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなりました。

本書は、一昨年度本調査を行いました東前遺跡の発掘調査の報告です。文化財保護の一助として、皆様にご活用いただければ幸いです。

なお、文末ながら調査にあたり、ご理解とご協力をいただいた日本道路公団中部支社ならびに同松阪工事事務所、三重県県土整備部高速道推進室、同松阪駐在、大台町教育委員会をはじめ、地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成16年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1．本書は、三重県多気郡大台町菅合字川合に所在する東前（ひがしまえ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書が扱う調査成果は、『近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』としてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。

3．調査は、下記の体制で実施した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査第二課　主査兼第三係長　森川　常厚

主　事　　五嶋　史佳

業務補助職員　　北川　ゆき　　中島　沙恵

中村　敬子　　廣田　洋子

山路　艶子

発掘作業委託　株式会社アコード

4．本書の執筆・編集・写真撮影は、五嶋史佳が担当した。

5．本書が対象とした実調査面積は、702㎡である。

6．本書が対象とした現場調査期間は、平成13年12月10日から平成14年２月14日である。

7．本書で示す方位は、国土座標第Ⅵ係を基準とする座標北を用いた。尚、磁北は約６度30分西偏（平成10年、国土地理院）している。

8．本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土坑　　ｐｉｔ：柱穴

9．本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（９版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、1989年）に準拠した。

10．発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた（敬称略）。

大西幸二　　藤澤良祐　　大台町教育委員会　　地元地権者各位

11．本書が扱う発掘調査の原因事業は、日本道路公団中部支社による近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）建設事業である。

12．発掘調査の経費は、日本道路公団中部支社が負担した。

13．本書で扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、当三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　遺構 …… 6
　1　層序 …… 6
　2　遺構 …… 6
Ⅳ　遺物 …… 14
　1　鎌倉時代 …… 14
　2　室町時代 …… 14
　3　近世 …… 16
Ⅴ　結語 …… 22

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　調査区位置図 …… 4
第３図　遺跡周辺地形図 …… 5
第４図　土層断面図 …… 6
第５図　遺構平面図 …… 7
第６図　掘立柱建物 …… 8
第７図　ＳＫ38・43・44、Ｄ5pit10実測図 …… 9
第８図　ＳＫ16・17・22・25・45実測図 …… 11
第９図　ＳＤ34実測図 …… 12
第10図　遺物実測図（１） …… 17
第11図　遺物実測図（２） …… 18
第12図　遺物実測図（３） …… 19

挿表目次

第１表　遺跡一覧表 …… 3
第２表　土坑一覧表 …… 13
第３表　遺物観察表（１） …… 20
第４表　遺物観察表（２） …… 21

写 真 図 版

ＰＬ　１ ……調査前風景
……調査区遠景
ＰＬ　２ ……調査区全景
……掘立柱建物
ＰＬ　３ ……ＳＫ16･17･22･25、ＳＤ34等
……ＳＫ37･38･43･44･55等
ＰＬ　４ ……ＳＫ16
……ＳＫ45 転石除去前
ＰＬ　５ ……ＳＫ45 転石除去後
……ＳＫ45 石室除去後
ＰＬ　６ ……ＳＫ25
……ＳＫ38
ＰＬ　７ ……ＳＫ44
……ＳＫ43
ＰＬ　８ ……ＳＫ22 転石除去前、ＳＫ17
……ＳＫ22 転石除去後、ＳＫ17
ＰＬ　９ ……Ｄ５ pit10遺物出土状況
……ＳＤ34
……調査風景
……作業風景
ＰＬ１０ ……出土遺物

Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経過

近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）は、平成３年12月に整備計画が決定され、平成５年11月に施行命令が出されている。これに基づいて、日本道路公団名古屋建設局松阪工事事務所から平成９年１月30日付名建松工第26号により、遺跡確認の依頼があった。これを受けて三重県埋蔵文化財センターでは、路線予定地の埋蔵文化財を調査し、平成10年３月６日付教埋第636号にて、18ヶ所の遺跡を報告した。そして、同センターと日本道路公団で、これら18ヶ所の遺跡の取扱いについて協議を開始し、平成10年度より現地発掘調査に着手することで両者が合意した。

平成13年度の調査予定については、粟生城跡の本調査、滝辺Ｂ遺跡の全域・東前遺跡の一部の範囲確認調査、滝辺Ｂ遺跡の本調査の順番で実施することとなった。その後、東前遺跡においては用地買収が急速に進展し、全域において範囲確認調査を実施して本調査面積を確定したい旨、日本道路公団から依頼があった。これを受けて、11月５日に滝辺Ｂ遺跡と東前遺跡の範囲確認調査を開始した。滝辺Ｂ遺跡から開始して東前遺跡に移り11月28日に終了した。その結果、滝辺Ｂ遺跡は遺構・遺物とも確認されなかったが、東前遺跡は遺物包含層の残存とともにピットや土坑等が確認され、土師器の鍋や山茶椀・施釉陶器などが出土したため、集落跡の存在が予想された。以上により、東前遺跡においては、遺物包含層の残存する地点を中心とした700㎡の範囲で事前の発掘調査が必要と判断した。この結果は、12月3日付教埋330号にて日本道路公団中部支社に通知した。

日本道路公団との協議の結果、滝辺Ｂ遺跡が本調査に及ばなかったことと、東前遺跡の本調査面積が狭いことから、急遽、東前遺跡の本調査を13年度に行うこととした。

2　調査の経過

(1) 調査の概要

現地発掘作業は、作業員や発掘道具等の手配、発掘作業を株式会社アコードに委託し、調査を12月10日に開始した。文化財保護法第58条の２第１項の規定により平成13年12月12日付教埋第272号にて「発掘調査の報告」を三重県教育委員会へ行った。

調査はまず北側から始めた。調査区の西側の遺構密度は低いが、東側ではピットや土坑、溝などが集中して検出された。土坑の小石室や溝の石列など、記録作業に時間を費やしたため、当初の予定より若干遅れが出て、調査は翌年２月14日に終了した。小規模な調査のため現地説明会は開催しなかったが、代わりに、地元自治会に調査結果概要の回覧を依頼し、調査成果の周知を図った。

なお、出土遺物については、三重県教育委員会から平成14年３月５日付教ス生８－17号にて地元警察へ発見認定が通知されている。

(2) 調査日誌（抄）

12月10日　重機による表土掘削を開始。
12月14日　地区杭設定。
12月17日　人力掘削開始。遺構検出開始。
12月19日　調査区東壁土層断面図実測完了。
12月25日　SK16から鉄製品（刀子）出土。
12月26日　調査区西壁土層断面図実測完了。
12月27日　土器出土状況写真撮影。ほぼ北半分の遺構検出終わる。
１月８日　作業再開。雪がちらつく。
１月10日　F3～4にかけて、溝（SD34）に石列を検出。多数の土師器片が出土。
１月17日　山茶椀の写真撮影と実測。
１月23日　SK45から鉄製品（刀子）出土。調査区完掘。
１月25日　調査区遠景・全景遺構等の写真撮影。
２月１日　遺構実測完了。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

大台町は多気郡の中央に位置する。宮川とその支流大内山川左岸の東西21kmにわたり、標高500m程の山に囲まれて集落が形成されている。宮川を西に遡ると宮川村に接し、東に下ると度会郡度会町に続き、南は宮川と大内山川を境として度会郡大宮町に接している。また、ＪＲ紀勢本線と国道42号が町内を縦断し、松阪・伊勢方面と尾鷲方面を結んでいる。

東前遺跡（34）は、大台町の南西部に位置し、宮川とその支流大内山川との合流付近の扇状地にある。遺跡の南側は山が連なり、北側には民家及び田畑が広がっている。山を背にして立つと、左に三瀬谷ダムで堰き止められた宮川上流が、右には大内山川が見られる位置である。遺跡のすぐ前を県道川合大宮線が通っているが、これはかつての熊野街道でもあり、この辺りが伊勢から熊野方面と宮川村方面への分岐点であり、交通の要所であったことが窺われる。現在では、ＪＲ紀勢本線が熊野街道に沿うように走り、大内山川を挟んで国道42号が通っている。行政上は多気郡大台町菅合字川合に属する。

2　歴史的環境

当地域の歴史は、旧石器時代にまで遡ることができる。旧石器時代遺跡としては県下最大の規模を誇る出張遺跡が栃原および新田の最東端、宮川と支流濁川との合流点に向けて舌状に延びる中位段丘の先端部一帯にある。また、栃原駅のすぐ西、東へ向けて張出す舌状の台地には宮野西出遺跡が、また出張遺跡の南西約300mには中野遺跡（25）がある。

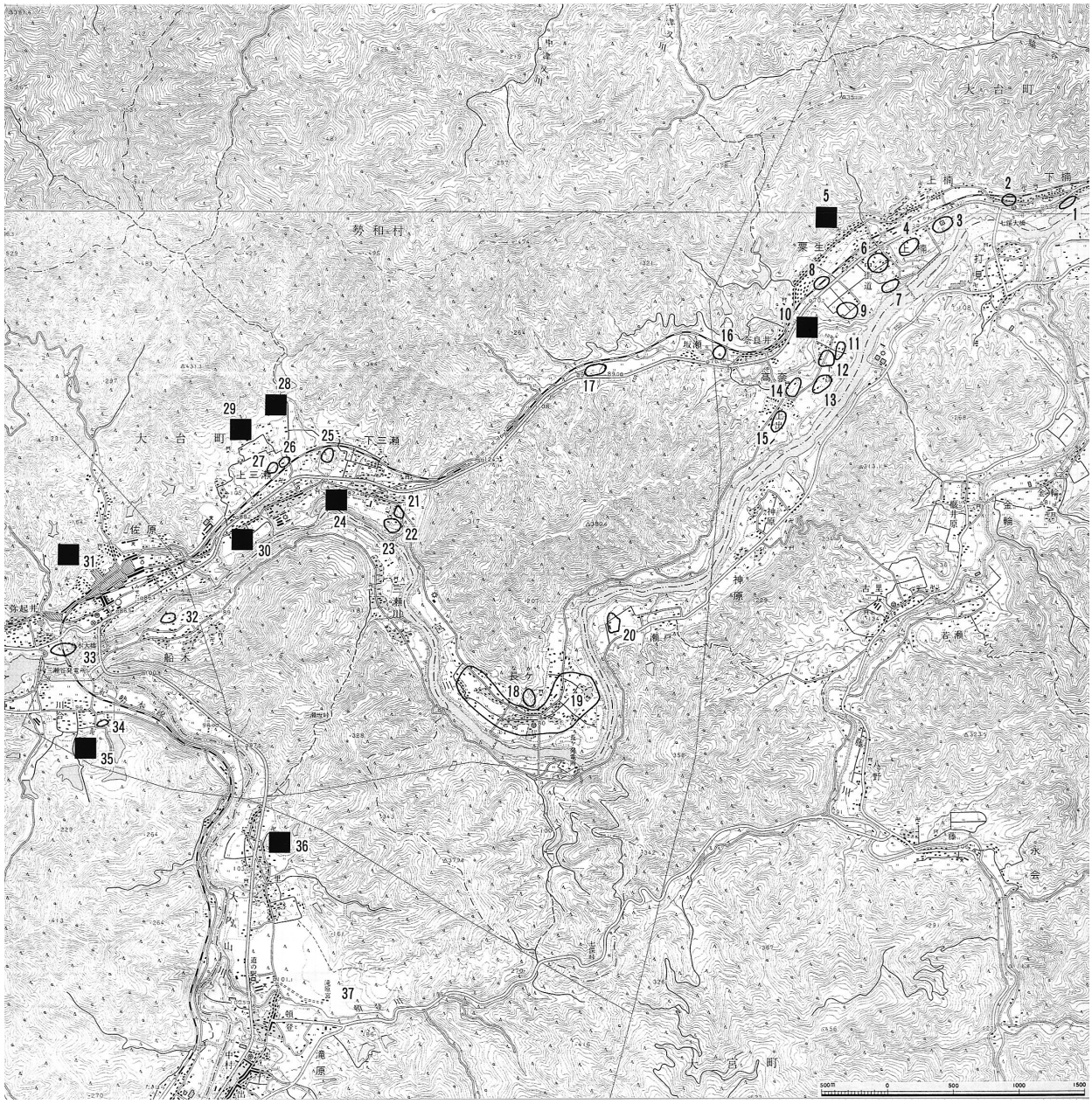
その他、向林遺跡（33）、深谷東遺跡（千代字深谷）等の旧石器時代、縄文時代の遺跡が多く、三重県下においては旧石器時代の最も遺跡集中度の高い地域である。縄文時代の遺跡は、大台町全遺跡数の半数近くを占めている。

弥生時代の遺跡は、中沖遺跡（上菅）、林地遺跡（13）等があるが、前の時代に比べると非常に貧弱である。林地遺跡[1]は高奈集落の東南方、宮川左岸の段丘端部よりやや内陸部に位置する。弥生時代後期の壺、甕、高杯が出土している。このように生活用具が出ていることは、弥生時代中期から後期にかけて人々が定着したことを物語るものである。

つづく古墳時代～平安時代にかけての遺跡は、ごく少数しかない。古墳時代では、後期の落人古墳群（下新田字落人）があるのみである。下新田集落の南方、新田地区の平地面の中央部に位置し、西より東へゆるやかに傾斜する丘陵端部にあり、須恵器、鉄刀等の出土遺物から、６世紀末葉に位置付けられる。滝原宮（37）は、東前遺跡から大内山川を挟んで南東の方角に３km弱ほどの距離にあり、伊勢神宮の別宮として奈良時代以前に造営されたと思われる。平安時代の遺跡は、ＪＲ川添駅の南西300mの所に西ノ谷遺跡[2]（4）がある。遺物には、縄文時代の石鏃のほかに平安時代の甕、室町時代の土師器鍋、江戸時代の青磁等が出土している。

中世に入ると、この辺りが北畠氏の勢力範囲であったためか、関連の居城跡と伝承されているものがいくつか見られる。具教が居城とした上三瀬北方の山腹にある上三瀬城址[3]（北畠具教三瀬館）（29）は、上三瀬集落の北側、海抜431mの山の南斜面一帯にあり、土壇や土塁が発見されている。具教の家臣が城主と伝えられ、三瀬館の南東約900mにある下三瀬城址（24）は、北側に宮川を臨み、段丘の続く東と西に堀切を備え、その間に２ヶ所の方形の土塁が並ぶ。

その他にも多数の中世城館が知られ、奈良井の集落の北東、国道42号川添橋のすぐ南側にある奈良井城址（10）は、29×15mの平坦地と段丘の続く西側に幅10mの堀切がある。さらに新発見を含め茶臼山砦（28）、油谷西村館址（30）、佐原城跡（註伊勢の中世）（31）、隣接する大宮町側に野後城跡（36）等、やや密集した分布を呈する。発掘調査されたも



第１図　遺跡位置図（１：50,000）「この地図は国土地理院長の承認を得て、同院発行の２万５千分の１地形図（伊勢佐原・横野）を複製したものである。（承認番号　平15部複、第190号）」

番号	遺　跡　名	時　期	番号	遺　跡　名	時　期	番号	遺　跡　名	時　期
1	下楠遺跡	縄　文	14	浜井場下出遺跡	縄文・中世	27	上三瀬遺跡	縄　文
2	下楠西遺跡	—	15	高瀬遺跡	縄　文	28	茶臼山砦	中　世
3	川添遺跡	—	16	板瀬遺跡	縄　文	29	上三瀬城址	中　世
4	西ノ谷遺跡	縄文・中世	17	ケヤ谷遺跡	縄　文	30	油谷西村館址	中　世
5	栗生城跡	中　世	18	長ヶ中世墓群	中　世	31	佐原城跡	中　世
6	谷ノ上遺跡	縄文・弥生	19	長ヶ遺跡	中　世	32	舟木中世墓	中　世
7	向海道遺跡	縄　文	20	樋ノ谷遺跡	中　世	33	向林遺跡	旧石器
8	ウツ野遺跡	縄文・弥生	21	神戸北遺跡	旧石器・縄文	34	東前遺跡	中　世
9	鳥見谷遺跡	縄　文	22	神戸遺跡	—	35	川合城跡	中　世
10	奈良井城址	中　世	23	三瀬の渡し	中　世	36	野後城跡	中　世
11	久保遺跡	旧石器・縄文	24	下三瀬城址	中　世	37	滝原宮	古　代
12	称名院前遺跡	中　世	25	中野遺跡	縄　文			
13	林地遺跡	弥　生	26	上三瀬東遺跡	縄　文			

第１表　遺跡一覧表

のとしては、粟生城跡（5）、川合城跡（35）がある。粟生城跡[④]は、川添地区北部の山地から宮川に向かう尾根の先端部付近に立地し、堀切・曲輪等を有する山城である。遺物は土師器の皿・鍋が多いが、天目茶椀、灰釉平椀等も出土している。これらの遺物から城の存続期間は14世紀末から15世紀中頃までとされている。

また、川合城跡[⑤]は、東前遺跡のすぐ南、標高150mの山頂に位置する。段丘面との比高は50mで、東西幅300m、南北幅400mほどの広がりを持つ。立地・城の構造は、粟生城に類似する点も多いが、発掘調査の結果、遺物の出土は皆無で、その時期は特定されていない。東前遺跡の南側に接して松林寺（浄土宗）があり、城址へ上るには、この寺の境内からが最短である。

集落跡では中世墓を伴う遺跡に絞ってみてみると、長ヶ中世墓群（18）、舟木中世墓（大宮町舟木）（32）等が見られる。長ヶ中世墓群[⑥]は、長ヶ集落の北方部、丘陵南斜面に分布する墳墓群である。墳墓は黄褐色粘質土を掘りこみ築かれたもので、骨壷を安置し“餅石”と呼ばれる扁平な川原石で蓋がされていた。通常墳墓上に置かれる五輪塔は失われていた。火葬骨は、口縁部を割り取った古瀬戸四耳壷に納められていた。墳墓の造営時期については、出土土器の形態から室町時代前期と考えられている。大内山川を挟んだ対岸の大宮町舟木にある舟木中世墓[⑦]からは、やや遡って鎌倉時代の三筋壷や和鏡などが出土している。

その他の中世の遺跡としては、上記の他に深谷西遺跡（千代字深谷）、十南寺遺跡（上三瀬字十南寺）、森ノ上遺跡（柳原）、樋ノ谷遺跡（20）等があるが、発掘調査は行われておらず、その実態は不明である。

このように、大台町周辺には中世の城館や集落跡が多数見られ、当時の繁栄を垣間みることが出来る。

〔註〕

① 皇學館大学考古学研究会　『大台町の遺跡』大台町教育委員会　1975年

② 同上

③ 栗谷節二　「第二章中世」『大台町史　通史』　平成８年３月31日

④ 森川常厚　『粟生城跡』　三重県埋蔵文化財センター　2003年３月

⑤ 下村登良男　『川合城跡発掘調査報告』　大台町教育委員会　2001年3月

⑥ ①と同じ

⑦ 埋蔵文化財包蔵地調査カードによる

第２図　調査区位置図（1：2,000）〈1～11の▬は範囲確認調査位置〉

第３図　遺跡周辺地形図（1：5,000）

Ⅲ　遺　　構

1　層序

基本層序は表土が灰褐色粘質土（耕作土）で、以下明赤褐色粘質礫混土（床土）、褐灰色粘質礫混土（旧耕作土）、暗赤褐色土（鉄分沈殿層）、にぶい黄橙色粘質土等の層があり、地山は明黄褐色粘質土である。遺物包含層は暗褐色粘質土で、暗赤褐色土（鉄分沈殿層）下、あるいは、にぶい黄橙色粘質土下に認められる。包含層の厚さは最大で30cm程であり、調査区の中央から東半分の位置にある。南側（山側）では水田開発による包含層の削平が見られる。検出面は標高97m前後である。

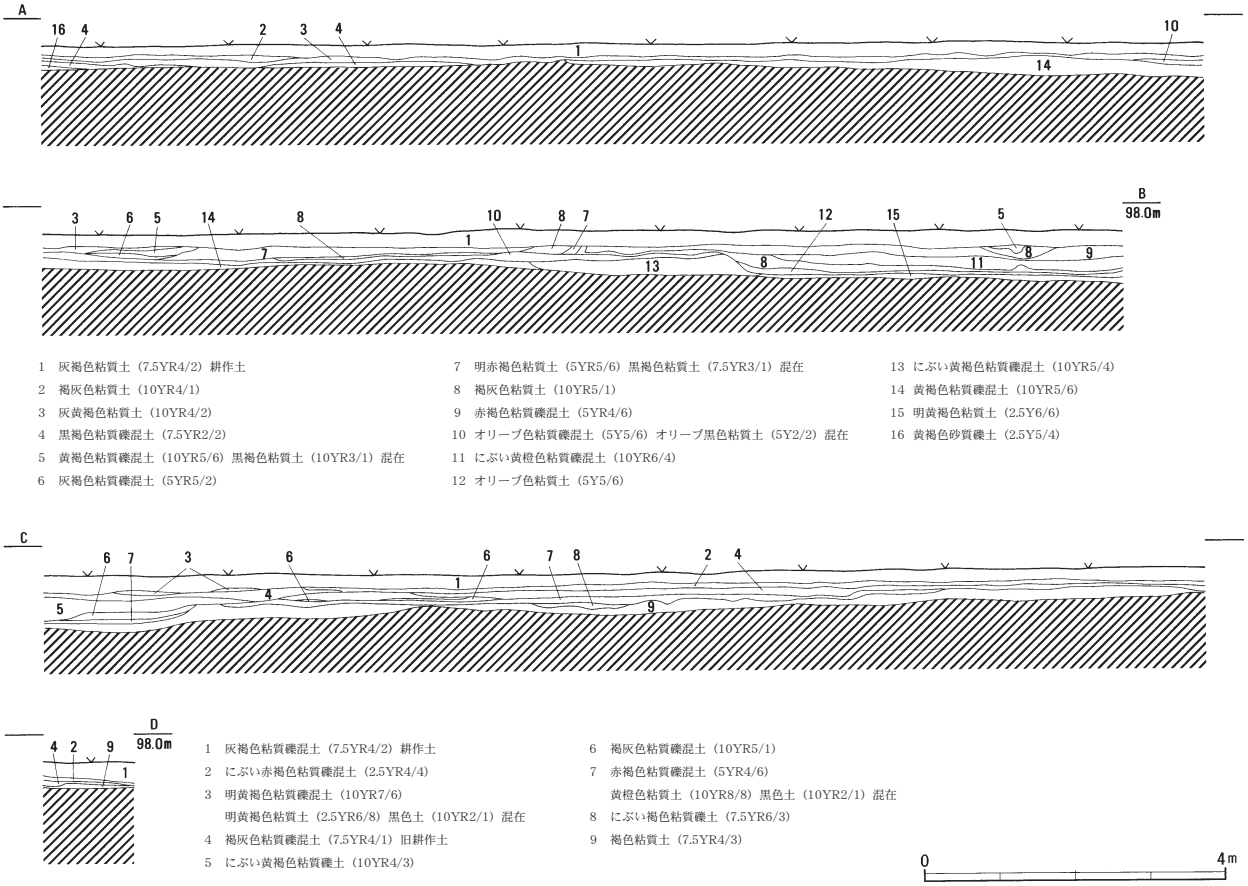
2　遺構

調査の結果、主に鎌倉時代から室町時代の遺構を確認することができた。そのうちわけは、掘立柱建物３棟、土坑15基、溝３条等である。

以下、主な遺構について鎌倉時代と室町時代に分けて記述する。その他のものについては、遺構一覧表を参照されたい。

(1) 鎌倉時代

遺構は、主に土坑でＳＫ１・37・43・44・55の５基がある。調査区の南東部に４基（ＳＫ37・43・44・55）が比較的集中して検出され、他の１基（ＳＫ１）は、北中央部で検出された。土坑はすべて直径0.8～1.2mの円形又は不整円形を呈している。



1　灰褐色粘質土（7.5YR4/2）耕作土
2　褐灰色粘質土（10YR4/1）
3　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）
4　黒褐色粘質礫混土（7.5YR2/2）
5　黄褐色粘質礫混土（10YR5/6）黒褐色粘質土（10YR3/1）混在
6　灰褐色粘質礫混土（5YR5/2）
7　明赤褐色粘質土（5YR5/6）黒褐色粘質土（7.5YR3/1）混在
8　褐灰色粘質土（10YR5/1）
9　赤褐色粘質礫混土（5YR4/6）
10　オリーブ色粘質礫混土（5Y5/6）オリーブ黒色粘質土（5Y2/2）混在
11　にぶい黄橙色粘質礫混土（10YR6/4）
12　オリーブ色粘質土（5Y5/6）
13　にぶい黄褐色粘質礫混土（10YR5/4）
14　黄褐色粘質礫混土（10YR5/6）
15　明黄褐色粘質土（2.5Y6/6）
16　黄褐色砂質礫土（2.5Y5/4）

1　灰褐色粘質礫混土（7.5YR4/2）耕作土
2　にぶい赤褐色粘質礫混土（2.5YR4/4）
3　明黄褐色粘質礫混土（10YR7/6）
　明黄褐色粘質土（2.5YR6/8）黒色土（10YR2/1）混在
4　褐灰色粘質礫混土（7.5YR4/1）旧耕作土
5　にぶい黄褐色粘質礫土（10YR4/3）
6　褐灰色粘質礫混土（10YR5/1）
7　赤褐色粘質礫混土（5YR4/6）
　黄橙色粘質土（10YR8/8）黒色土（10YR2/1）混在
8　にぶい褐色粘質礫土（7.5YR6/3）
9　褐色粘質土（7.5YR4/3）

第４図　土層断面図（1：20）

第５図　遺構平面図（1：200）

ＳＫ３７　長径１ｍ、短径0.8m、深さ0.4mの不整円形の土坑。底は水平で土坑壁は垂直である。埋土は炭を含まない暗褐色土である。土師器皿（１・２）・鍋（３）、山茶椀（４～６）が確認されたが小片である。

ＳＫ５５　長径0.9m、短径0.8m、深さ0.3mのほぼ円形の土坑。ＳＫ37よりやや小さいが、形状は同様の特徴を示している。埋土は炭を含まず、褐色でＳＫ37よりやや明るい。遺物は、土師器皿・小皿・鍋、山茶椀等の小片が出土している。

ＳＫ４３　南北に1.1m、東西に1.15m、深さ0.4mのほぼ円形の土坑である。底は平坦であるが、中央部がやや深くなっている。炭化物を含む暗褐色の埋土を取り除くと、拳大のものからその２倍程度の大きさの石が数十個ほど底から5～10cmほどの高さに雑然と集積されていた。遺物は土師器皿・小皿・鍋、山茶椀の小片等があった。

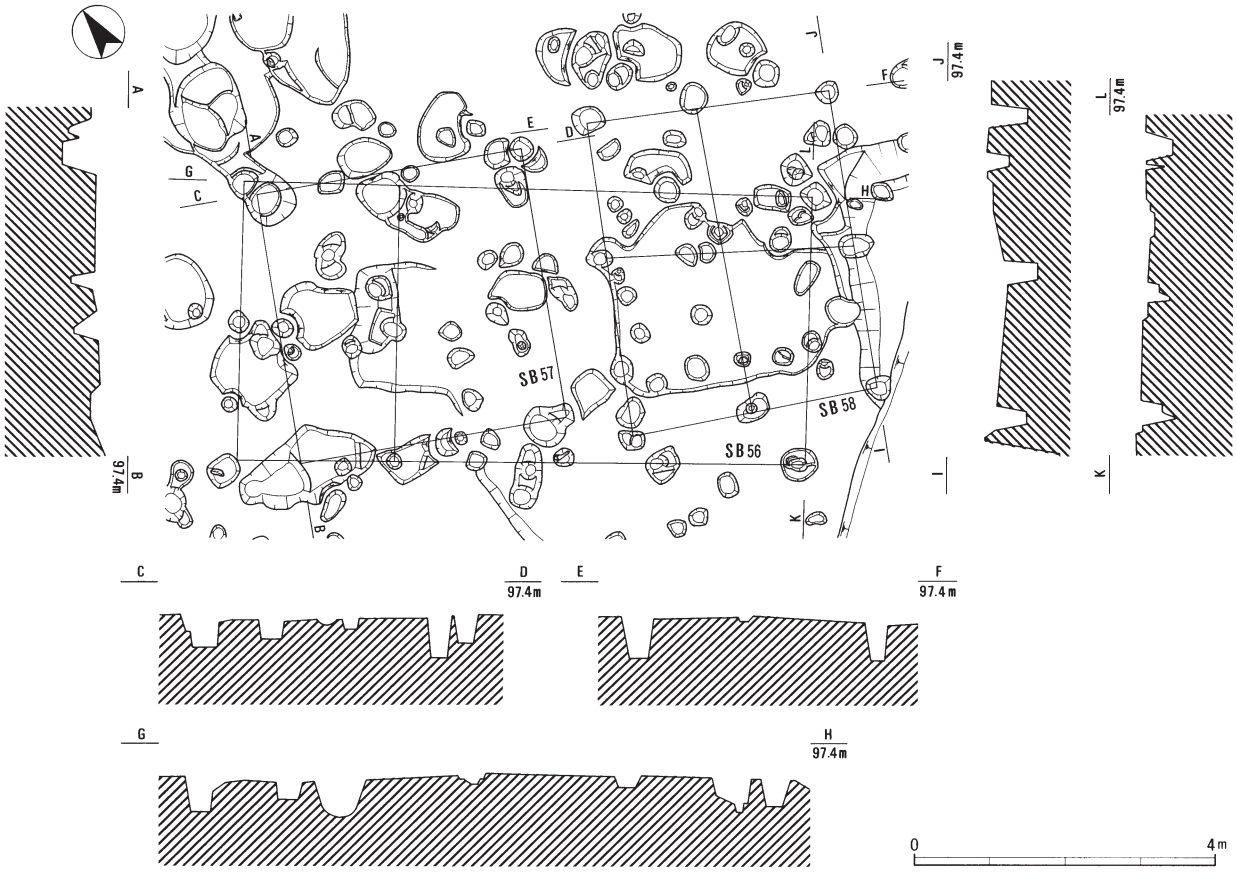
ＳＫ４４　長径1.2m、短径１ｍ、深さ0.4mのほぼ円形の土坑。炭化物を含む暗褐色の埋土を取り除くと、ほぼ水平な底から６～８cmの高さに10～20cm立方大の石が6個出土した。これらの石に組まれた様子はない。遺物は、鎌倉時代の土師器皿（９）・小皿・鍋、山茶椀などの小片であった。ＳＫ43とは1.2mの間隔をおいて造られており、規模も同程度で形状や遺物の出土状況も類似する。ＳＫ43のほうが石の数が極端に多いが、同じ用途で作られた可能性がある。

(2) 室町時代

遺構は、掘立柱建物３棟、土坑10基、溝３条等である。多くは、調査区北東に集中している。この時代の遺構が最も多い。

掘立柱建物は、出土遺物から、いずれも室町時代のものと言える。ＳＢ56とＳＢ57・58とは立地面が重なっている。

土坑は掘立柱建物の北に８基（ＳＫ13・14・16・17・18・19・22・25）が集中しており、残る２基（ＳＫ38・45）は南東寄りにある。直径0.8～1.3mのほぼ円形のもの（ＳＫ13・14・19・38）、



第６図　掘立柱建物（1：100）

縦0.8横1.0～1.5mの長方形に近いもの（ＳＫ16・17・22・25)、直径1.1～1.5mの楕円形のもの（ＳＫ18・45）があった。

Ａ．掘立柱建物

ＳＢ５６　桁行３間、梁行２間の西面庇付掘立柱建物であると思われる。柱間は、桁行、梁行とも約1.8m、庇は約２mでやや広く、庇の部分は掘立柱建物に伴う柱列の可能性もある。柱掘形は円形及び方形で一様ではない。径は0.2～0.4mである。検出面からの深さは12～60cmとばらつきが見られる。柱痕跡は確認できなかった。小片ではあるが、出土した土師器鍋等から、この建物は室町時代後期に建てられたと思われる。

ＳＢ５７　南西および東側中央、北側中央のそれぞれの柱穴が確定できなかった。桁行と梁行が共に２間の掘立柱建物であると思われるが、共に3.6mであるため、棟方向は不明である。柱掘形は略円形をしており、直径約0.3m～0.4m、検出面からの深さは30～45cmを測る。土師器鍋等が出土した。柱痕跡は確認できなかった。

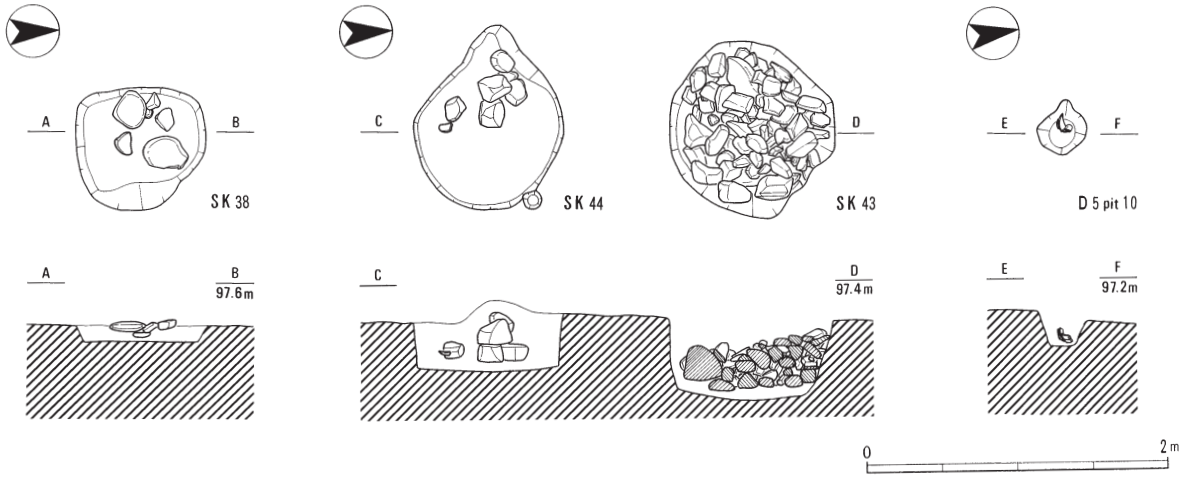
ＳＢ５８　棟方向は不明であるが、桁行梁行共に２間の掘立柱建物である。80cmの間隔をおいてＳＢ57と並行に建てられている。南側と北側の柱間はそれぞれ1.6m、東側の柱間は２mずつの等間であるが、西側は1.8mと2.2mで不等間となっている。柱掘形は不整円形、直径が約0.3～0.4m、検出面からの深さは８～60cmとばらつきが見られる。出土した土師器鍋等から、室町時代後期に建てられたと思われる。

Ｂ．土坑

ＳＫ１６　およそ縦1.6m、横0.9m、深さ0.3mのほぼ長方形の土坑。底部は水平である。炭化物の混じった淡褐色埋土を取り除くと、人頭大の石が底から２～３cm浮いた位置で、7個ほぼ一列に土坑のやや東寄りに埋められていた。石はそれぞれが接しているため人為的に置かれているようにも見え、小石室片壁の名残の可能性もある。また、刀子（20）は、底から４cm浮き、北西隅に刃先を北に向け刀身を水平にした状態で確認された。埋葬品と考えられるが、元位置を保っていない可能性もある。

ＳＫ１７　長径1.1m、短径0.9m、深さ0.3mのほぼ長方形の土坑である。底部はほぼ水平で瓢箪形、土坑壁はやや傾斜している。にぶい褐色の埋土を取り除くと、北隅に人頭大の一個の石が底から10数cmの高さの位置で出土した。石の上面は弱く熱を受けている。土師器皿・鍋の小片が出土した。

ＳＫ２２　長径1.3m、短径0.7m、深さ0.3mのほぼ長方形の土坑で、底部はほぼ水平である。炭化物の混じった暗褐色粘質土の埋土とともにいくつかの石が土坑全体を覆っていた。転石と思われるものを除くと、一部が欠けてはいるものの土坑壁のほぼ四方を石で囲むようにして20×70cm程の小石室が形成されていた。上記の転石の中には扁平な石があったが、縦方向に埋まっていたことから底石ではなく蓋石かとも思われる。土坑の北側の石列下、底から4cmほど浮いた位置で土師器皿（22）を確認した。小片であったものを接合した結果、ほぼ完形に復元



第７図　ＳＫ38・43・44、Ｄ５pit10実測図（1：100）

できた。よって石室構築時に埋納されたものと考えられ、あらかじめ破壊した後、埋納したものかもしれない。以上のことから土壙墓であったと思われる。

遺物は、22の他には土師器小皿（21）・鍋、青磁等の小片があった。

ＳＫ２５　長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3～0.4mの楕円形の土坑。底部はほぼ水平である。炭化物を含む褐色の埋土と転石を除去すると、人頭大をはじめ十数個の石が土坑壁に沿って、長方形状の空間（20×60cm程度）を形成するように石を巡らせ、小石室を形成していた。床石らしいものは見あたらなったが、小石室の上に5個の石が覆うように置かれており、蓋石のようである。土師器鍋の小片が採取されたが、埋納された様子は無かった。小石室の規模・形状・蓋石の存在において、ＳＫ22との共通点が見られる。

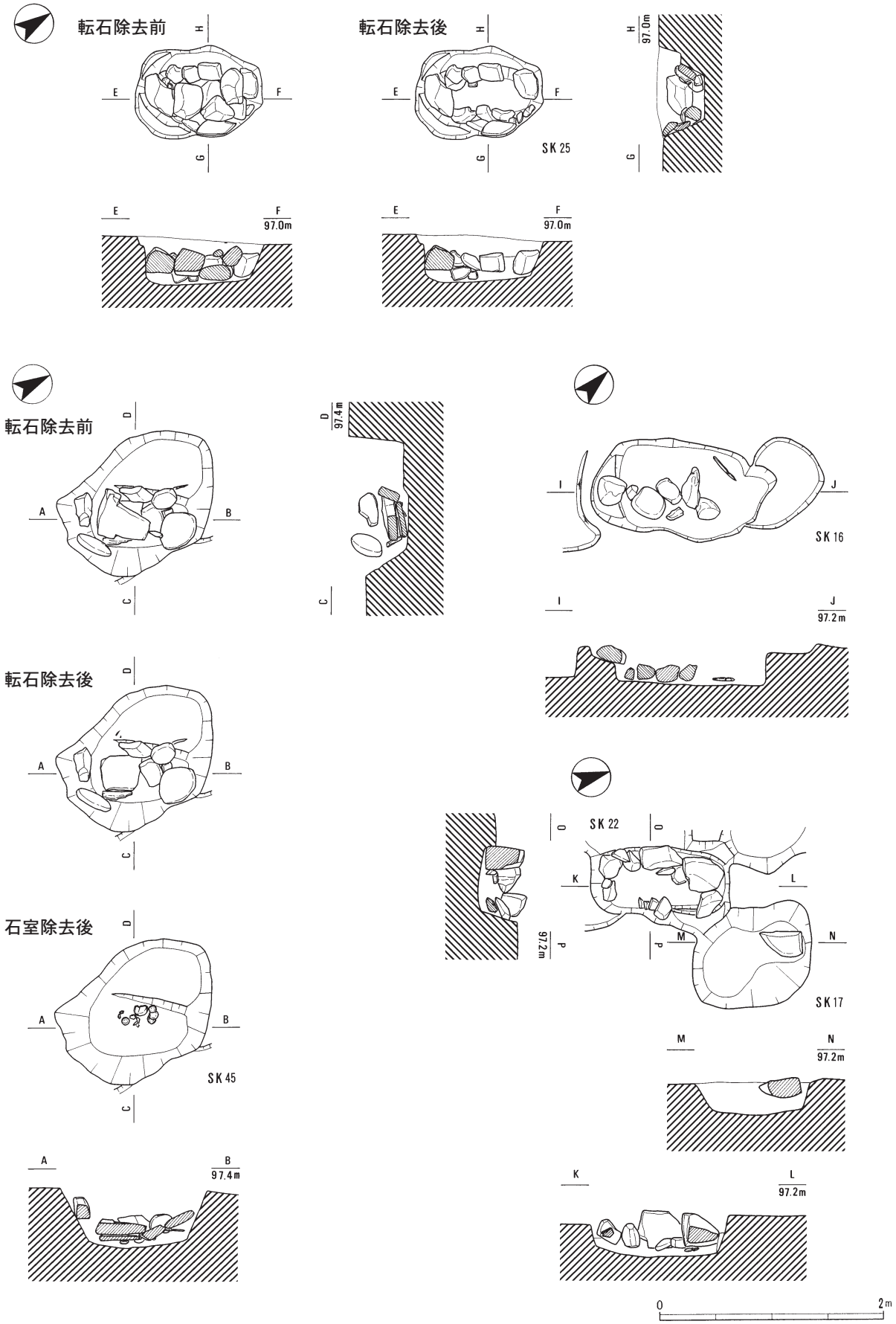
ＳＫ３８　長径0.9m、短径0.8m、深さ0.1mの不整円形の土坑で、底部は水平である。土坑の西側中央部に、ほぼ完形の土師器皿（８）が底から３cmほど浮く位置に水平かつ上向きに出土し、埋納されたものと思われる。その上に暗褐色の埋土と共に拳大から人頭大のほぼ円形の扁平な石５個が、土坑を覆うように置かれていた。石組を確認できなかったが土壙墓であると思われる。

ＳＫ４５　南北1.5m、東西1.1m、深さ0.4～0.5mの楕円形の土坑である。炭化物を含む暗褐色の埋土とともに転石と思われる厚さ10cmの扁平な石を取り除くと、方形状に石が並べられていた。底には、厚さ５cm径30cmの床石が敷かれており、30×60cm程の長方形状に小石室を形成していたと考えられる。したがって、最初に除去した扁平な石は蓋石の可能性が高い。小石室は、土坑南東側に寄せて構築されており、土坑底部は小石室側がやや段差を持って低くなる。

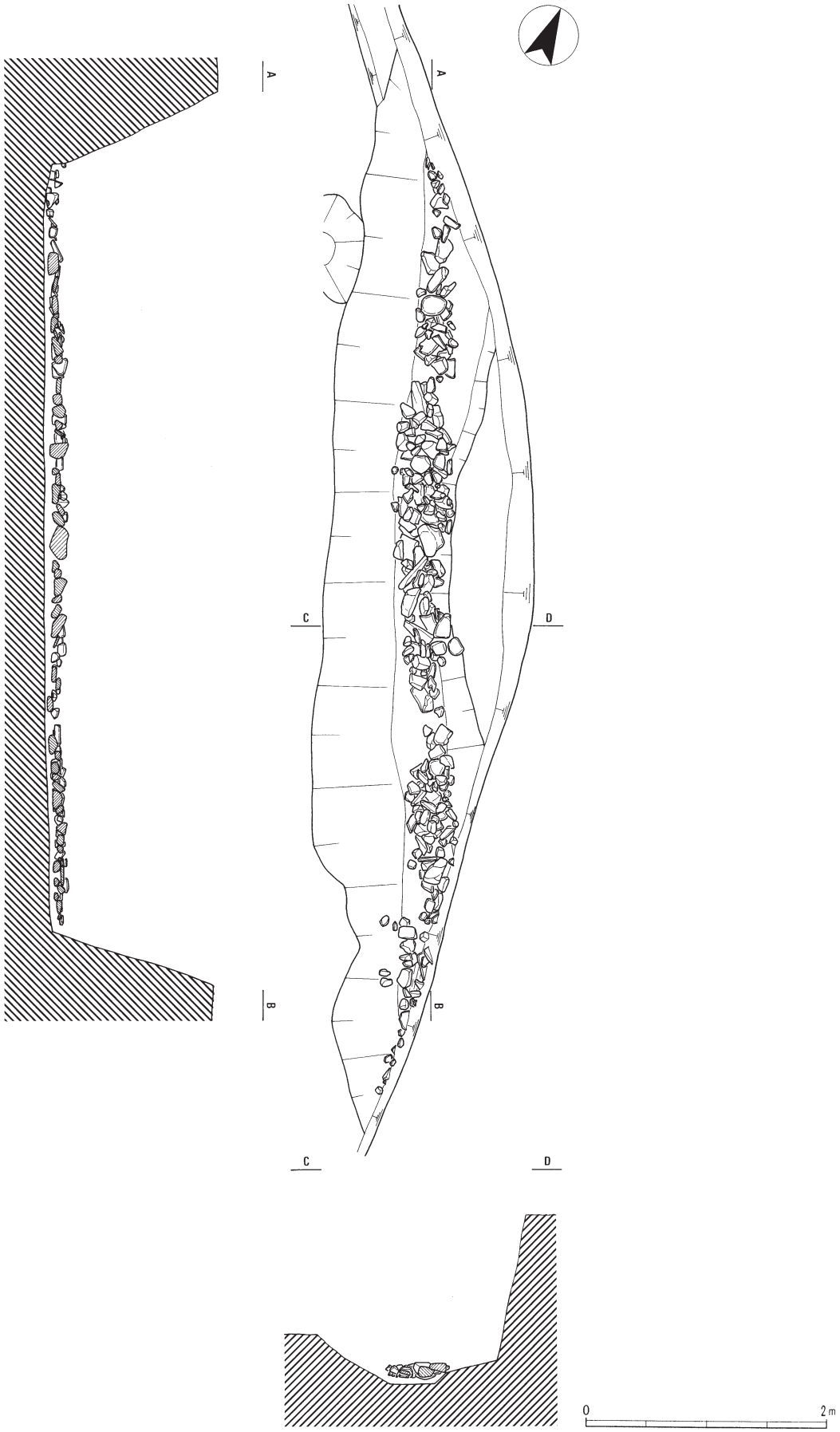
遺物の出土状況については、床石直下から完形の土師器小皿・皿（10～17）がまとまって出土した。その内（12、13、15）は正立し、（14）は倒立し、（10、11、16）は正立から中央部に傾斜するように置かれていた。また、小石室外の北側に刀子（18）が刃先を北にして置かれていた。

Ｃ．溝

ＳＤ３４　調査区の北東部分に、北西から南東の方向へ長さ９m以上に渡って延びており、両端は調査区外へ続く。溝の東側が調査区外にかかるため実際の幅は特定できないが、1.7m以上はあると思われる。溝の中央部分は、幅0.5mほどでさらに深くなっている。この部分には大小さまざまな石が帯状に敷き詰められていた。溝の深さは浅い部分で0.2～0.3m、深い部分で0.4mある。遺物は、土師器鍋（43～54）の破片が多数出土しているが、土師器皿（42）、天目茶椀（59）、陶器甕（61）などの小片も少量出土している。



第８図　ＳＫ16・17・22・25・45実測図（1：50）



第９図　ＳＤ34実測図（1：50）

遺構番号	地区	規模（m）	深さ（m）	平面形	主な出土遺物	時期	備考
SK１	C3C4	0.9×1.0	0.1～0.2	不整円形	土師器鍋	鎌倉	
SK２	C4	1.0×1.2	0.3	不整方形	土師器小皿	室町前期	
SK３	C4	0.9×1.9	0.1～0.5	不整方形	土師器鍋	室町後期	
SK４	D4	0.8×1.0	0.2	不整方形	土師器皿	室町？	
SK５	C5	2.8×3.0	0.1～0.2	不整方形	土師器皿、施釉陶器・椀・仏飯具	近世	
SK６	D5	1.0×1.4	0.1～0.3	不整方形	なし	不明	
SK８	C5C6D5D6	2.0×3.0	0.1	不整方形	土師器鍋・茶釜、山茶椀	室町中期	
SK９	C6D6	0.6×0.7	0.2	長方形	土師器	室町？	
SK10	D1D2	0.5×1.4	0.1	楕円形	土師器鍋	室町？	
SK11	D2	1.0×1.2	0.2	不整円形	土師器	室町？	
SK13	D3	0.9×1.2	0.3～0.4	ほぼ円形	土師器皿・鍋	室町後期	
SK14	E2E4	直径1.3	0.4	円形	土師器鍋、近世陶器	室町後期	
SK16	D2	0.9×1.6	0.3	長方形	土師器皿・鍋、刀子	室町前期	刀子埋納
SK17	D3E3	0.9×1.1	0.3	長方形	土師器皿・鍋	室町前期	
SK18	E3	1.1×1.5	0.2	楕円形	土師器皿・鍋	室町前期	
SK19	E3	0.8～0.9	0.3	円形	土師器鍋	室町後期	
SK20	E3	0.7×0.8	0.1	円形	土師器皿・鍋	室町後期	
SK21	B5	0.9×1.1	0.1	不整円形	近世陶器	近世	
SK22	D3	0.7×1.3	0.3	ほぼ長方形	土師器皿・小皿・鍋、青磁小片	室町前期	石室有り
SK23	D4	0.6×1.0	0.1～0.4	不整円形	なし	不明	
SK24	D4	0.6×1.4	0.5	長円形	土師器皿・鍋	室町中期	
SK25	E4	0.8×1.2	0.3～0.4	ほぼ長方形	土師器鍋	室町後期	石室有り
SK26	E4	直径0.7	0.1～0.2	不整円形	土師器皿	室町	
SK27	E3E4	0.4×0.7	0.2	半円形	土師器鍋	室町後期	
SK29	E4	0.4×0.8	0.1～0.5	半円形	土師器皿	室町	
SK30	E4	0.8×0.9	0.1	不整方形	土師器鍋	室町後期	
SK32	E3	1.0×1.0	0.5	不整円形	土師器鍋・羽釜	室町後期	
SK33	D4D5E4E5	2.4×3.0	0.1	不整方形	土師器鍋、瀬戸皿	室町後期	
SK35	E5F5	1.6×3.5	0.3	不整方形	土師器皿・鍋、瓦器	室町前期	
SK36	F5	0.7×1.6	0.1～0.4	不整円形	土師器鍋	室町中期	
SK37	E7	0.8×1.0	0.4	不整円形	土師器皿・小皿・鍋、山茶椀	鎌倉	
SK38	F8	0.8×0.9	0.1	不整円形	土師器皿・小皿、山茶椀	室町前期	完形の土師器皿埋納
SK39	D8D9	1.2×1.3	0.2×0.3	不整円形	土師器皿	室町前期	
SK40	C9	0.9×1.3	0.1～0.2	不整方形	なし	不明	
SK41	C9	0.8×1.0	0.2	長方形	なし	不明	
SK42	E6	直径0.9	0.3	円形	なし	不明	
SK43	F7F8	1.1×1.15	0.4	ほぼ円形	土師器皿・小皿・鍋、山茶椀	鎌倉	
SK44	F8	1.0×1.2	0.4	ほぼ円形	土師器皿・小皿・鍋、山茶椀	鎌倉	
SK45	F6F7	1.1×1.5	0.4～0.5	不整円形	土師器皿･小皿､刀子	室町前期	石室有り。完形の土師器皿・小皿、刀子埋納
SK47	F7F8	1.1×1.6	0.1	不整方形	土師器皿、山茶椀	鎌倉	
SK52	G8	0.2×0.9		三日月形	土師器小皿	室町前期	
SK53	F8F9G8G9	0.8×1.5	0.2	不整方形	なし	不明	
SK54	F9F10G9G10	2.4×3.0	0.1×0.3	不整円形	土師器鍋、陶器壷	室町前期	
SK55	E7	0.8×0.9	0.3	ほぼ円形	土師器皿・小皿・鍋、山茶椀	鎌倉	

第２表　土坑一覧表

Ⅳ　遺　　物

遺物の全体量は、整理箱26箱あり、主に鎌倉時代と室町時代のものであるが、平安時代や江戸時代のものも少量だが出土した。

以下、主なものについて記述する。個々の詳細については観察表を参照されたい。

1　鎌倉時代

土師器皿・小皿・鍋、陶器の山茶椀が出土している。

ＳＫ３７出土遺物（第10図１～６）　土師器小皿・皿・鍋、山茶椀の小片が出土したが、土師器（皿１・２、鍋３）、山茶椀（４～６）を図示した。

１・２は、小片からの復元であるが、口径14～15cm器高は共に2.6cm程度で、口縁部は直立からやや内彎化の傾向が見られ器壁がやや厚めである。３は小片であるため口径・器高とも不明であるが、口縁部はヨコナデが施され、端部はやや肥厚し内側に折り返しが認められる。４・５は口縁部の小片であるが、口径がそれぞれ13、17cm程度であろうと思われる。６は扁平な高台が貼り付けられている。

ＳＫ４４出土遺物（第10図７）　土師器皿（７）は、口縁部がとがり気味でやや内彎化の傾向が見られ、器壁がやや厚めである。

2　室町時代

土師器皿・小皿・鍋がほとんどであるが、土師器茶釜・羽釜、陶器山茶椀・天目茶椀・皿・片口鉢・甕、青磁、鉄製品（刀子）、銭貨等を出土している。

ＳＫ３８出土遺物（第10図８・９）　土師器小皿・皿、山茶椀が出土したが、土師器小皿（８）皿（９）を図示した。８は厚手の作りで、前代の混入と考えられる。９はほぼ完形で口径が約12cm、口縁部が内彎し、薄手である。

ＳＫ４５出土遺物（第10図10～19）　土師器小皿（10～15）皿（16・17）、鉄製品（18・19）を図示した。土師器小皿・皿は小石室下からまとまって出土したもので一括性は高いものと考えられる。

土師器小皿（10～15）は、口縁部4分の3残存の15を除き完形かほぼ完形で、口径が7.5～8.0cm、器高が0.7～1.1cmである。

土師器皿16はほぼ完形で、17は口縁部2分の1残存している。両方とも口径11cm器高2.4cmを測り、口縁部が内彎し器壁がごく薄い。18は刀子である。ほぼ完形で全長19.3cm、幅2.1cmを測る。わずかに柄の端が欠けている。部分的に木片が付着し、鞘と柄に納められていたと思われる。目釘穴はＸ線写真では確認できた。19は小片であるため判断できかねるが、18の柄の部分である可能性がある。これも木片が付着している。

ＳＫ１６出土遺物（第10図20）　土師器皿・鍋、鉄製品を出土しているが、図示できるものは刀子（20）のみである。20は完形で出土した。一部分にしか木目を確認できなかったが、刀子は鞘に収められた状態で埋納されたと考えられる。全長30.6cm幅は2.5cmあり、刀子としては大型の部類に入る。柄の部分に目釘穴が２つ確認できた。

ＳＫ２２出土遺物（第10図21・22）　土師器小皿・皿・鍋、青磁を出土しているが、図示できるものは土師器小皿（21）、皿（22）である。21は口縁部の小片であるが、推定口径が９cm、器高が1.1cmと思われる。22は口縁部完存で全体的には3分の2残存している。器壁は薄く、口縁は内彎している。口径が約11cm、器高は2.7cmである。

ＳＫ５２出土遺物（第10図23）　図示できるものは土師器小皿（23）のみである。器壁は薄く、扁平な形態であるが、口縁部は若干立ち上がり、器高1.2cmを測る。

ＳＫ２出土遺物（第10図24）　図示できるものは土師器小皿（24）のみである。前述した23と同様なものであるが、やや深く、器高約1.35cmを測る。

ＳＫ３９出土遺物（第10図25）　図示できるもの

は土師器皿（25）のみである。口縁部4分の1残存であるが、口径約11cm器高約2.6cmと推測される。口縁がやや尖り気味で内彎している。

ＳＫ８出土遺物（第10図26・27）　土師器鍋・茶釜、山茶椀を出土したが、図示できるものは茶釜（26）、山茶椀（27）である。26は口縁部の小片であるが、口径が推定13cmと思われる。27は底部が2分の1残存している。口径約14.6cm、底径約７cm、器高4.7cmである。底部全面に糸切り痕が認められる。また、高台が付けられる部位に糸切り痕が鮮明であり、粘土塊からの切り離し痕も明瞭なことから、高台は当初よりつけられていなかったものと思われる。

ＳＫ５４出土遺物（第10図28・29）　図示できるものは土師器鍋（29）、陶器壺（28）である。29は小片であるが、口径が28cmと推測される。口縁部の折り返しが長めで、上端を強くヨコナデされている。28は口縁部の小片で、口径が約７cmである。

ＳＫ３５出土遺物（第10図30～40）　土師器小皿・皿・鍋の多数の小片、瓦器を出土したが、土師器（皿30～33、小皿34、鍋36～40）、瓦器（35）を図示した。

30～33はいずれも小片である。32の口縁部は直立に近く、他は内彎化して尖り気味である。外面は、未調整で指圧痕が多い。口径はいずれも９cmで、器高は1.9～2.6cmとやや幅がある。34は半分が残存しており、口径約７cm推定器高1.1cmである。35は底部２分の１の残存、底径5.4cmと推定され、断面方形のしっかりした高台を貼り付ける。内面にヘラミガキが施されている。瓦器椀は今回の調査ではこの1点のみの出土である。36～40もいずれも小片である。口径25～32cm、口縁端部は内に大きく折り返される。39・40の観察から、ハケメの後、体部下半にヘラケズリが施されることがわかる。

ＳＤ３４出土遺物（第11図41～62）　土師器皿・鍋等の破片が多数出土したが、土師器小皿・皿各１（41・42）、土師器鍋12（43～54）、羽釜（55）、茶釜（56～58）、天目茶椀（59）、施釉陶器（60）、陶器甕（61）・練鉢（62）を図示した。

土師器小皿・皿はいずれも小片で、41は口径が約９cm、器高が0.8cmと低く、42は口径約10cm、口縁部は内彎しておらず、器壁もやや厚い。43は鍋の小片である。内面にヘラ記号のような印が認められ、外面はハケメが施されていた。鍋の47・48・51・52は３分の１～４分の１程の残存があるが、そのほかは小片からの復元である。口径は28～40cmにわたる。44～48は口縁部の折返し部分上端を強くヨコナデするのに対し、49～54は口縁部を折り返した後、外側と内側から摘み上げる様にまとめている。56～58は土師器茶釜であるが、口縁端部の形態は三様である。56・57の口縁部はやや内傾するが、58は直立気味である。56の口縁部上端は丸みをおびているのに対し、57の上端はやや外側に摘み出されている。58は口縁部上端がヨコナデされることにより、やや内に肥厚する。59は瀬戸後Ⅲ期[1]の天目茶椀で、内外面に鉄釉が、高台周辺にはうすい錆釉が施される。60は内面に灰釉が施された陶器で、底部に糸切り痕が見られる。61の縁帯は口縁部に接していない。（内面から口縁部上端にかけて自然釉が付着している。）62の口縁部は、ヨコナデにより上端部と横端部が突出し、内面にハケメ外面に指オサエが見られる。

ＳＫ２０出土遺物（第12図63・64）　土師器皿・鍋を出土したが、図示できるものは鍋（63・64）である。

63は口縁端部を内に短く折り返す。64は口縁部小片からの復元であるが、口径は約34cmと見られる。口縁部上端は、折り返しの後外側と内側からつまみ上げられている。

ＳＫ１３出土遺物（第12図65）　土師器皿・鍋が出土したが、図示できるものは鍋（65）のみである。小片であるが口径約26cmと推定される。口縁部を折り返した後、上端をヨコナデしている。外面にハケメ、内面に工具ナデが見られる。

ＳＫ３２出土遺物（第12図66）　土師器皿・鍋・羽釜を出土しているが、図示できるものは羽釜（66）のみである。口縁端部を外に折り返し、体部には外面にハケメが見られる。

ＳＫ３３出土遺物（第12図67）　土師器皿・鍋、土錘、施釉陶器皿を出土したが、図示できるものは施釉陶器皿（67）のみである。口縁部の小片で、口径約11cm、口縁部に釉が施されている。

3　近世

ＳＫ５出土遺物（第12図68～70）　土師器皿・鍋、施釉陶器（椀・仏飯具）等を出土しているが、土師器皿（68）、施釉陶器仏飯具（69）、施釉陶器椀（70）を図示した。

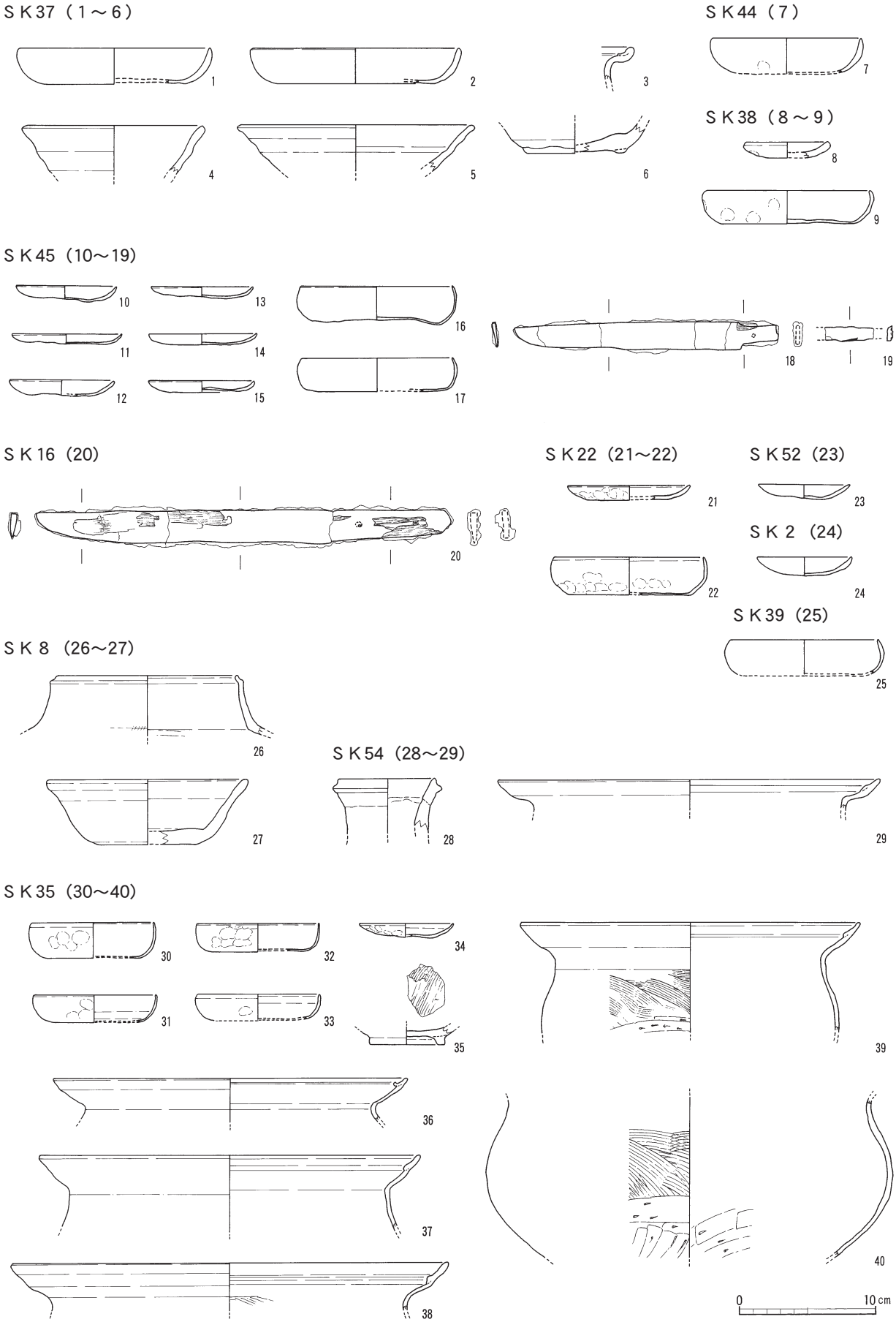
69は底部完存で内外面に釉が施されている。脚部の裏側に「玉」と墨書されている。70は内面全体から高台近くまで釉が施されている。

ｐｉｔ及び包含層（第12図71～87）　土師器鍋や釜等が多数出土している。土師器鍋（71・72）、羽釜（73・74）、焙烙（75・76）、山茶椀（77）、施釉陶器平椀（78）、陶器甕（79）、青磁椀（80～83）、青磁皿（84）、銭貨（85～87）を図示した。

71・72は共に鍋の小片であるが、口径がそれぞれ約27、28cmで、口縁端部を折り返した後、内側と外側からやや内側に向かって又は上に摘み上げるようにまとめられている。73・74は共に羽釜の小片であるが図上にて復元を試みた。口径が27.4cm、口縁部下に指オサエ、体部外面にハケメが見られる。75・76は共に焙烙鍋の小片であるが、口径がそれぞれ28、34cmである。77は口縁部4分の1残存、底部完存で、口径16.2cm底径6.7cmである。口縁部に輪花があり、底部は貼付高台で糸切り痕が見られる。78は小片であるが、口径が約17cm、釉が内面から外面の上半にかけられている。外面には直接重ね焼きのためか、別個体片が癒着している。80の外面には連弁紋が施されている。84の内面には櫛描文が見られる。85～87は表面が摩滅しているので文字が判読し難いが、それぞれ淳化元寶（北宋990年）、元祐通寶（北宋1086年）、熙寧元寶（北宋1068年）であろう。

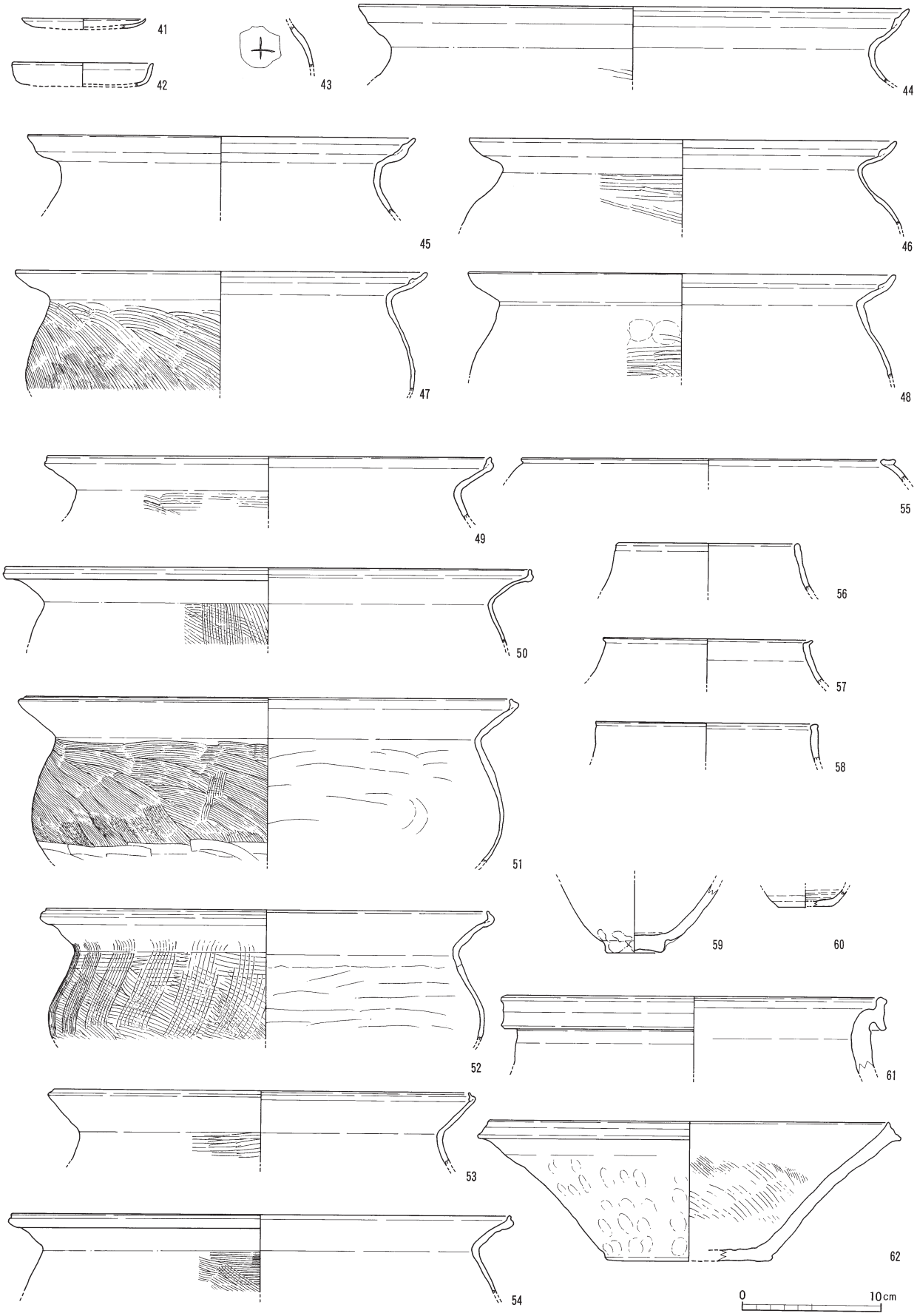
〔註〕

① 藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『研究紀要Ｘ』瀬戸市歴史民俗資料館　1991年

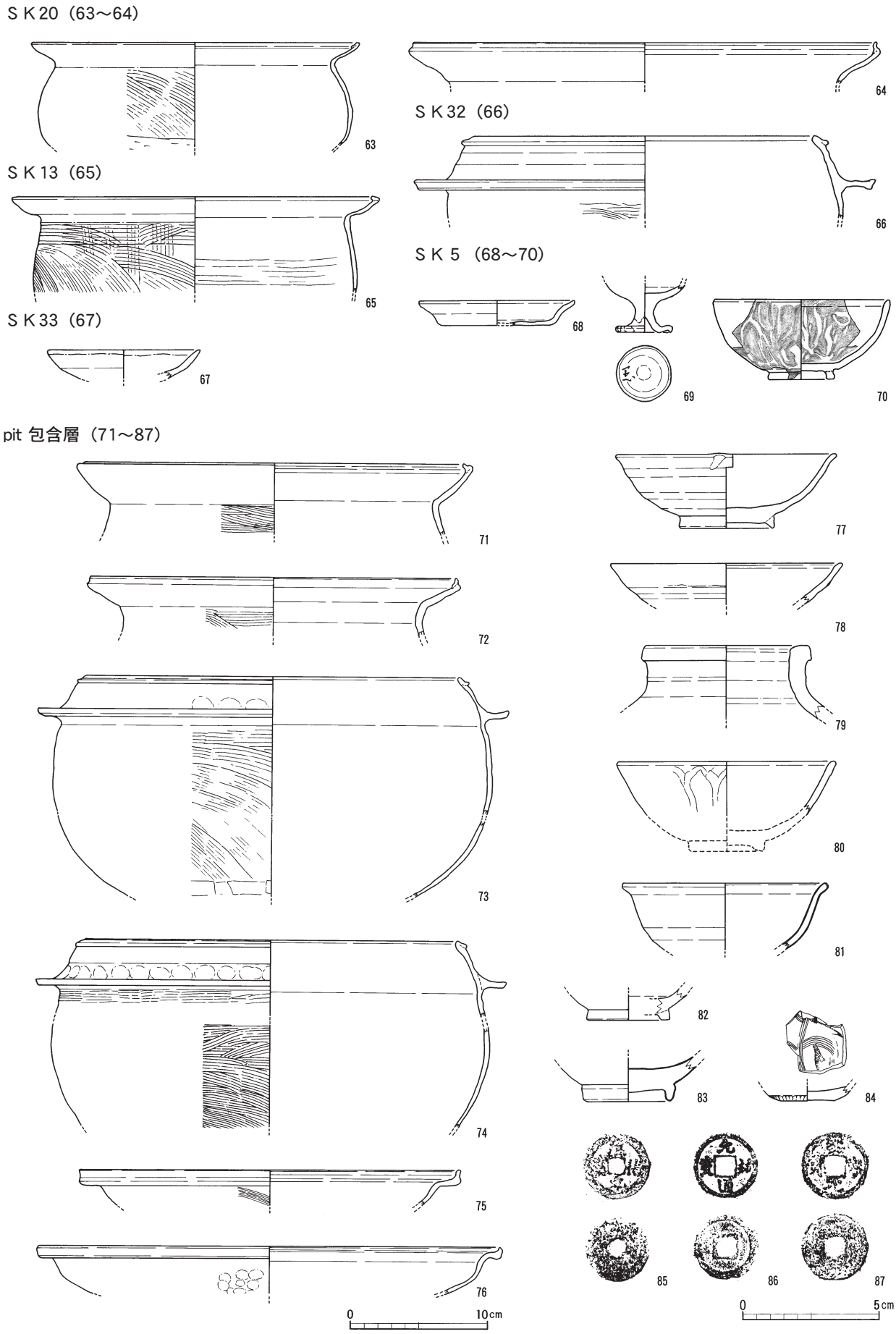


第10図　遺物実測図(1)（１：４）

ＳＤ34（41～62）



第11図　遺物実測図(2)（１：４）



第12図　遺物実測図(3)（1：4、85～87は1：2）

No.	登録No.	種別器種	出土位置 遺構	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	005-08	土師器　皿	E7 SK37	口径14.0 器高 2.6	ヨコナデ	密(3mm以下の小石含む)	良	淡黄橙 10YR8/3	口縁部1/6	
2	005-07	土師器　皿	E7 SK37	口径15.0 器高 2.55	内：ヨコナデ 外：指オサエ	密(2mm以下の小石含む)	良	淡黄橙 10YR8/3	口縁部1/8	
3	005-05	土師器　鍋	E7 SK37		ヨコナデ	密(1mm以下の小石含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部小片	
4	005-02	陶器　山茶椀	E7 SK37	口径13.0	ロクロナデ	密(1mm以下の小石含む)	良	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部1/8	
5	005-03	陶器　山茶椀	E7 SK37	口径17.0	ロクロナデ	密(2mm以下の小石含む)	良	明褐灰 5YR7/2	口縁部小片	
6	005-04	陶器　山茶椀	E7 SK37	脚径 7.0	ロクロナデ	密(2mm以下の小石含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/3	底部1/4	
7	005-09	土師器　皿	F8 SK44	口径11.0 器高 2.6	内：ヨコナデ 外：指オサエ	密	良	浅黄 5YR7/4	口縁部1/4	
8	006-03	土師器　小皿	E8 SK38	口径 6.0 器高 1.1	ヨコナデ	密(1mm以下の小石含む)	良	灰白 5Y8/2	口縁部1/4	
9	006-04	土師器　皿	E8 SK38	口径12.0 器高 2.5	内：ナデ 外：指オサエ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	完形	
10	001-01	土師器　小皿	F7 SK45	口径 7.3 器高 1.0	内：ナデ 外：オサエ	密(1mm以下の砂粒と雲母含む)	良	浅黄橙 10YR8/4	完形	
11	001-02	土師器　小皿	F7 SK45	口径 8.0 器高 0.7	内：ナデ 外：オサエ	密(1mm以下の砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/3	完形	
12	001-04	土師器　小皿	F7 SK45	口径 7.6 器高 1.1	内：ナデ 外：オサエ	密(0.5mmの砂粒2mmの石含む)	良	淡黄 2.5Y8/3	完形	
13	001-03	土師器　小皿	F7 SK45	口径 7.5 器高 0.7	内：ナデ 外：オサエ	密(0.5mmの砂粒含む)	良	淡黄 2.5Y8/3	完形	
14	001-05	土師器　小皿	F7 SK45	口径 7.9 器高 0.8	内：ナデ 外：オサエ	密(1mm以下の砂粒含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/4	ほぼ完形	
15	001-06	土師器　小皿	F7 SK45	口径 7.8 器高 0.7	内：ナデ 外：オサエ	密(1mm以下の砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部3/4	
16	001-08	土師器　皿	F7 SK45	口径11.0 器高 2.4	内：ナデ 外：オサエ	密(1.5mmの砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/4	完形	
17	001-07	土師器　皿	F7 SK45	口径11.0 器高 2.4	内：ナデ 外：オサエ	密(1.5mmの砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/2	
18	018-01	鉄製品　刀子	F7 SK45	長さ19.3 幅 2.1					ほぼ完形	目釘穴、木片付着
19	018-03	鉄製品　刀子	F7 SK45	長さ 3.7 幅 1.1					小片	木片付着
20	018-02	鉄製品　刀子	D2 SK16	長さ30.6 幅 2.5					完形	目釘穴、木片付着
21	004-03	土師器　小皿	D3 SK22	口径 9.0 器高 1.1	内：ナデ 外：指オサエ	やや密	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/6	
22	004-04	土師器　皿	D3 SK22	口径11.0 器高 2.7	内：ナデ 外：指オサエ	やや密	良	淡黄 2.5Y8/3	口縁部完存 全体2/3	
23	006-07	土師器　小皿	G8 SK52	口径 6.7 器高 1.2	ヨコナデ	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部1/4	
24	006-06	土師器　小皿	C4 SK2	口径 7.0 器高 1.35	ヨコナデ	密	良	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部1/2	
25	006-05	土師器　皿	D8 SK39	口径11.0 器高 2.6	ヨコナデ	密(2mm以下の砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/4	
26	003-04	土師器　茶釜	D6 SK8	口径13.0	内：工具ナデ 外：ハケメ	密	やや不良	内:にぶい黄橙10YR7/3 外:褐灰 10YR4/1	口縁部1/6	
27	003-05	陶器　山茶椀	D6 SK8	口径14.6 底径 7.0 器高 4.7	ロクロナデ	密(0.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y8/1	底部1/2	
28	006-02	陶器　壺	G9 SK54	口径 7.0	ロクロナデ	やや粗	良	暗赤褐 2.5YR3/2	口縁部1/4	
29	006-01	土師器　鍋	G9 SK54	口径28.0	ロクロナデ	密(2mm以下の砂粒含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部1/12	
30	009-03	土師器　皿	E5 SK35	口径 9.0 器高 2.6	内：ナデ 外：指オサエ	やや密(0.5mm以下の砂粒含む)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/6	
31	009-01	土師器　皿	E5 SK35	口径 9.0 器高 2.0	指オサエ	密	良	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁部1/4	
32	009-05	土師器　皿	E5 SK35	口径 9.0 器高 2.05	内：ナデ 外：指オサエ	密	不良	灰白 2.5Y8/2	口縁部1/6	
33	009-02	土師器　皿	E5 SK35	口径 9.0 器高 1.9	内：ナデ 外：指オサエ	密	良	灰白 7.5Y8/1	口縁部1/6	
34	009-04	土師器　小皿	E5 SK35	口径 7.0 器高 1.1	指オサエ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	全体1/2	
35	008-03	瓦器	E5 SK35	底径 5.4	ヘラミガキ（並行ミガキ？）、貼り付け高台	密	良	内:浅黄橙10YR8/3、灰N4/、外:灰N4/、浅黄橙10YR8/3	底部1/2	いぶしがない部分あり
36	007-03	土師器　鍋	E5 SK35	口径26.0	ナデ	粗(2mm以下の砂粒を多く含む)	良	内:灰白 10YR8/2、 外:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/6	
37	008-01	土師器　鍋	E5 SK35	口径28.0	内：ナデ 外：工具ナデ？	粗(3mm以下の砂粒を多く含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部小片	
38	007-02	土師器　鍋	E5 SK35	口径32.0	内：ハケメ 外：ヨコナデ	粗(2mm以下の砂粒を多く含む)	良	灰白 10YR8/2	口縁部1/6	
39	008-02	土師器　鍋	E5 SK35	口径25.0	内：ナデ 外：ナデ・ハケメ・ヘラ削り	粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	良	灰白 10YR8/2	口縁部1/6	
40	007-01	土師器　鍋	E5 SK35	体部径30.0	内：ヘラ削り・ナデ 外：ナデ・ハケメ・ヘラ削り	粗	良	内:灰黄褐 10YR6/2 外:灰黄褐 10YR5/2	体部小片	
41	012-01	土師器　小皿	F4 SD34	口径 9.0 器高 0.8	指オサエ	やや密	良	浅黄 2.5Y7/3	口縁部1/6	
42	012-02	土師器　皿	F4 SD34	口径10.0 器高 1.8	ナデ	やや密	やや不良	灰白 2.5Y8/2	口縁部1/6	

第３表　遺物観察表(1)

No.	登録No.	種別器種	出土位置　遺構	計測値（cm）	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
43	011-03	土師器　鍋	F3 SD34		ハケメ	やや密	良	内:浅黄橙 10YR8/3 外:灰褐 7.5YR5/2	小片	ヘラ記号
44	014-01	土師器　鍋	F4 SD34	口径40.0	内：ナデ 外：ナデ・ハケメ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	不良	内:にぶい黄橙10YR7/2 外:褐灰 10YR5/1	口縁部1/6	外面煤付着
45	013-01	土師器　鍋	F3 SD34	口径28.0	ナデ？	粗(1mm以下の砂粒を多く含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	全体に磨耗著しい
46	013-03	土師器　鍋	F4 SD34	口径31.0	内：ナデ 外：ハケメ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	内:にぶい黄橙10YR6/3 外:暗褐 10YR3/3	口縁部1/8	外面煤付着
47	020-01	土師器　鍋	F3 SD34	口径29.8	内：ナデ 外：ハケメ	粗（2mm以下の砂粒を含む）	良	にぶい黄 2.5YR6/3	口縁部小片体部1/4	
48	019-02	土師器　鍋	F4 SD34	口径31.0	内：ナデ 外：オサエ(ナデ)ハケメ	やや密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁部1/4	外面煤付着
49	012-05	土師器　鍋	F3 SD34	口径32.0	内：ナデ 外：ハケメ	やや密	良	内:にぶい黄橙10YR7/3 外:褐灰 10YR4/1	口縁部1/6	
50	014-02	土師器　鍋	F4 SD34	口径38.0	内：ナデ 外：ハケメ	密	やや不良	内:灰黄褐 10YR6/2 外:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/12	外面煤付着
51	021-01	土師器　鍋	F4 SD34	口径35.0	内：工具ナデ 外：ハケメ、削り	密	良	内:灰黄褐 10YR6/2 外:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部小片体部1/4	外面煤付着
52	019-01	土師器　鍋	F3 SD34	口径32.0	内：工具ナデ 外：ハケメ	やや密	良	内:にぶい黄橙10YR7/3 外:灰黄褐 10YR5/2	口縁部1/3	外面煤付着
53	020-02	土師器　鍋	F3 SD34	口径30.0	内：ナデ 外：ハケメ	やや粗（1mm以下の砂粒含む）	良	内:にぶい黄橙10YR6/3 外:灰黄褐 10YR4/2	口縁部1/8	
54	013-02	土師器　鍋	F3 SD34	口径36.0	内：ナデ 外：ハケメ	密	良	内:にぶい橙7.5YR7/4 外:黒褐 10YR3/1	口縁部1/6	
55	012-03	土師器　羽釜	F3 SD34	口径27.0	内：ナデ 外：ヨコナデ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部1/12	
56	011-06	土師器　茶釜	F4 SD34	口径13.0	内：ナデ 外：ナデ？	密	やや不良	内:灰オリーブ 5Y6/2 外:灰オリーブ 5Y5/2	口縁部1/6	外側磨耗
57	011-05	土師器　茶釜	F3 SD34	口径15.0	内：ナデ 外：ナデ？	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部1/3	外側磨耗
58	011-04	土師器　茶釜	F3 SD34	口径16.0	ナデ	密	良	にぶい黄橙　10YR7/3	口縁部1/6	
59	011-01	陶器　天目茶椀	F3 SD34	底径 4.0	内：鉄釉 外：鉄釉、さび釉、ロクロ削り	やや密	良	黒褐 10YR3/1 素地:灰白 7.5YR8/2	底部完存	瀬戸後Ⅲ期底部にも一部鉄釉付着
60	011-02	陶器　茶入れ？	F3 SD34	底径 4.0	内：自然釉、ロクロ削り	密	良	灰白 2.5Y7/1	底部1/3	灰釉
61	012-04	陶器　甕	F4 SD34	口径25.0	ロクロナデ	粗(3mm以下の砂粒を含む)	良	内:にぶい赤褐5YR4/3 暗オリーブ5Y4/3 外:にぶい赤褐5YR4/3	口縁部1/6	自然釉、縁帯下部に粘度塊釉着
62	002-01	陶器　鉢	F4 SD34	口径29.0 器高10.0	内：ヨコナデ・ハケメ 外：指オサエ・ナデ	密(1mm以下の砂粒を含む)	良	内:にぶい橙 5YR6/4 外:橙 2.5YR6/6	口縁部1/4	
63	004-02	土師器　鍋	E3 SK20	口径24.0	内：ナデ 外：ハケメ、ヘラ削り	密	良	灰黄褐 10YR6/2	口縁部1/2	外面煤付着
64	004-01	土師器　鍋	E3 SK20	口径34.0	内：ヨコナデ 外：ナデ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	灰褐 7.5YR6/2	口縁部1/10	外面煤付着
65	003-06	土師器　鍋	D3 SK13	口径26.0	内：工具ナデ 外：ハケメ	粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	内:浅黄橙 7.5YR8/3 外:にぶい黄橙10YR7/3	口縁部1/6	全体に磨耗著しい
66	005-01	土師器　羽釜	E3 SK32	口径25.0	内：ロクロナデ 外：板削り	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部1/4	
67	005-06	施釉陶器　皿	E5 SK33	口径11.0	ロクロナデ	密	良	釉:オリーブ 黄5Y6/3 素地:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部小片	
68	003-01	土師器　皿	C5 SK5	口径11.4 器高 2.8	内：ナデ･指オサエ 外：ナデ･指オサエ	密(少量の雲母を含む)	良	内:橙 5YR6/2 外:灰褐 5YR4/2	全体1/2	外面煤付着
69	003-03	施釉陶器仏飯具	C5 SK5	底径 4.0	ロクロナデ	密	良	釉:灰白 7.5Y8/2 素地:灰白 7.5YR8/2	底部完存	脚部の裏側に墨書
70	003-02	施釉陶器　椀	C5 SK5	口径12.8 器高 5.9	貼り付け高台、ロクロ削り	やや密	良	浅黄2.5Y7/3 釉:浅黄5Y8/3 素地:浅黄橙10YR8/3	口縁部1/6 底部完存	
71	016-03	土師器　鍋	E3 包含層	口径28.0	内：ナデ 外：ハケメ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	内:にぶい黄橙10YR7/3 外:にぶい褐7.5YR6/3	口縁部1/12	外面煤付着
72	016-01	土師器　鍋	E3 包含層	口径27.0	内：ナデ 外：ハケメ	やや密(0.5mm以下の砂粒含む)	不良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/6	外面煤付着
73	009-06	土師器　羽釜	D2 Pit1	口径27.4	内：削り・ナデ 外：指オサエ･ハケメ･削り	やや密(1mm以下の砂粒を含む)	不良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/12	外面煤付着
74	010-01	土師器　羽釜	D2 Pit1	口径27.4	内：ナデ 外：指オサエ・ハケメ	やや密(1mm以下の砂粒を含む)	良	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部1/4	73と同一個体か
75	016-02	土師器　焙烙鍋	E3 包含層	口径28.0	内：ナデ 外：ハケメ	密	不良	浅黄橙 10YR8/3	口縁部1/12	
76	015-03	土師器　焙烙鍋	F4 Pit2	口径34.0	内：ナデ 外：指オサエ	密	良	内:黒褐 7.5YR3/1 外:黒 2.5YR2/1	口縁部1/10	外面煤付着
77	002-02	陶器　山茶椀	D5 Pit10	口径16.2 底部 6.7	ロクロナデ・貼付け高台ナデ	密(0.5mm以下の砂粒含む)	良	内:灰白 5Y8/2 外:灰白 7.5YR7/1	口縁部1/4 高台完形	一ヶ所輪花
78	015-02	施釉陶器　平椀	D4 Pit12	口径17.0	ロクロナデ	やや密(2mm以下の石英を含む)	良	灰白 5Y7/2 素地:灰白 5Y8/2	口縁部1/12	重ね焼痕後Ⅳ期(新)
79	015-01	陶器　甕	D5 Pit1	口径12.0	内：ロクロ削り 外：ロクロナデ	やや粗(1mm以下の砂粒を含む)	良	灰赤 2.5YR5/2	口縁部1/4	
80	017-03	青磁　椀	F8 包含層	口径16.0	全体に釉、外面に連弁紋	密	良	灰オリーブ 5Y5/3 素地:灰白 7.5YR7/1	口縁部1/2	
81	015-05	青磁　椀	D4 包含層	口径15.0	全体に釉	密	良	オリーブ灰 10Y6/2 素地:灰白 2.5YR8/2	口縁部1/6	
82	017-02	青磁　椀	E3 包含層	底径 6.0	ハリツケ高台	密	良	灰 7.5Y6/1 素地:灰白 7.5Y8/1	底部小片	
83	015-04	青磁　椀	D2 包含層	底径 6.0	ロクロ削り、付け高台か	やや密	良	オリーブ灰 10Y6/2 素地:にぶい橙 7.5YR6/4	底部1/2	
84	017-04	青磁　皿	耕作土の下	底径 4.0	ロクロ削り、内面に櫛描文	密	良	灰オリーブ 5Y6/2 素地:灰白 2.5Y8/2	底部1/2	
85	017-05	銭貨	G8 包含層	重さ2.8g					完形	淳化元寶
86	017-06	銭貨	G8 包含層	重さ2.9g					完形	元祐通寶
87	017-07	銭貨	G8 包含層	重さ3.0g					完形	熙寧元寶

第４表　遺物観察表(2)

Ⅴ　結　　語

調査の結果、見つかった遺構や遺物から、次のようなことが考えられる。

３棟の掘立柱建物は室町時代の建物であり、土坑は鎌倉時代と室町時代のものである。建物跡と土坑跡とは一つも重なっていないということから、室町時代のある時期には同時に存在していたのではないかと推測される。すると、建物は土坑と何らかの関係があると考えられる。後述するように土坑のいくつかは土壙墓と考えられることから、掘立柱建物は被葬者の住居である可能性がでてくる。中世では住居に近接して墓を造ることが一般的にあったようで、当遺跡もその一例となり得る。鎌倉時代の建物跡は確認できなかったが、その時代の土師器の鍋や皿など生活に使う道具も多く出土していることから、この時代にも近くに集落が存在したことを推測することができる。

室町時代の土坑については、楕円形も円形として考えると、円形のもの（ＳＫ13・14・18・19）には石を伴うものがない。反対に長方形に近い形のもの（ＳＫ16・17・22・25・38）には石を伴う。後者の内、ＳＫ22・25には小石室と見られるものがあった。また、不整形のＳＫ45にも小石室を確認することができた。

また、ＳＫ16は、明確な石室の存在が確認できなかったが、石の大きさやその配列のようすから、石室が崩れたか、または石が抜き取られたと見られなくもない。そう見ると、室町時代の長方形土坑５基の内３基（ＳＫ16・22・25）に小石室の存在が確認または推測されたことになる。従って、この３基については土壙墓の可能性が高いものであろう。

ＳＫ45について詳察してみると、石室に対する掘り方の形状や遺物の出土位置等の状況から、ここには2つの土坑（南北に扁平する楕円形の土坑と北東から南西に向く長方形の土坑）が重なっている可能性があると思われる。その理由は、石組に対する掘り方として北に異様に広いことと、遺物の出土位置として床石直下または石室外に置かれていることの２点があげられる。長方形の土坑に小石室が存在し、かつそれほど破壊されていないことから考えると、楕円形の土坑が先に造られたと見るのが妥当であろう。楕円形の土坑は、石室を伴わず刀子や土師器皿を埋納して形成されたと仮定できる。一方、長方形の土坑は、楕円形の土坑が使用された後、刀子や土師器皿が取り除かれずに、その上に小石室を組んで形成されていったとの推測が可能である。しかし、土坑の中央部に若干の段差があり、長方形の土坑底が深いことに注目すると状況は変わってくる。つまり、楕円形の土坑に埋納品が存在していたとすると、長方形の土坑構築時には埋納品が掘り返されていると考えるのが妥当であるが、土師器皿の埋納状況に乱れが少ないことから、それが後から作られた小石室に伴う埋納品だと言えるのではないだろうか。したがって、先に作られた楕円形の土坑には埋納品はなく、後に作られた長方形の土坑に埋納品を納め、その上に接するように小石室が造られたと考えられるのである。

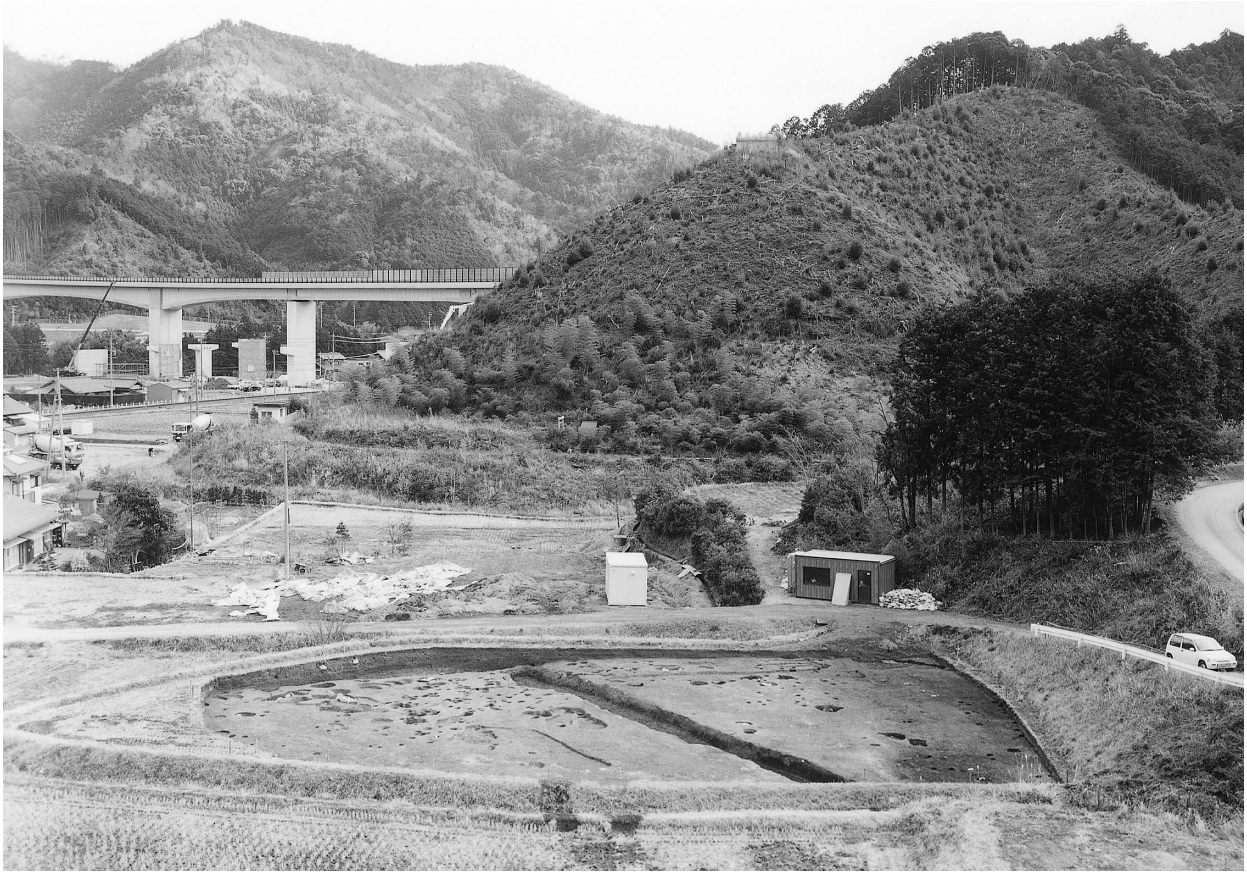
そのように見ると、ＳＫ22にも同様の状況が見られ、ほぼ完形の土師器皿が、小石室の石列直下で検出されている。わずか２例からではあるが、東前遺跡においては、小石室構築時に土師器皿を石室直下に埋納する祭祀が行われていたとも考えられる。しかし、他の遺跡では類例が見られず、今後の調査・研究に委ねられるところである。

尚、中世墓を検出している他の遺跡を調べたところ、玉城町勝田の楠ノ木遺跡[①]は、平安末～室町時代の遺跡であるが、報告書によると、室町時代後半以降のＳＫ33には木棺痕跡が推測される場所の外側脇に、刀子が刃先を北に向けて置かれていたことが示されている。当遺跡でも楠ノ木遺跡と同様に、ＳＫ16・45において小石室外で刃先を北に向けて置かれており、その意義についても同様に今後の事例の蓄積や研究を待たなければならない。

〔註〕

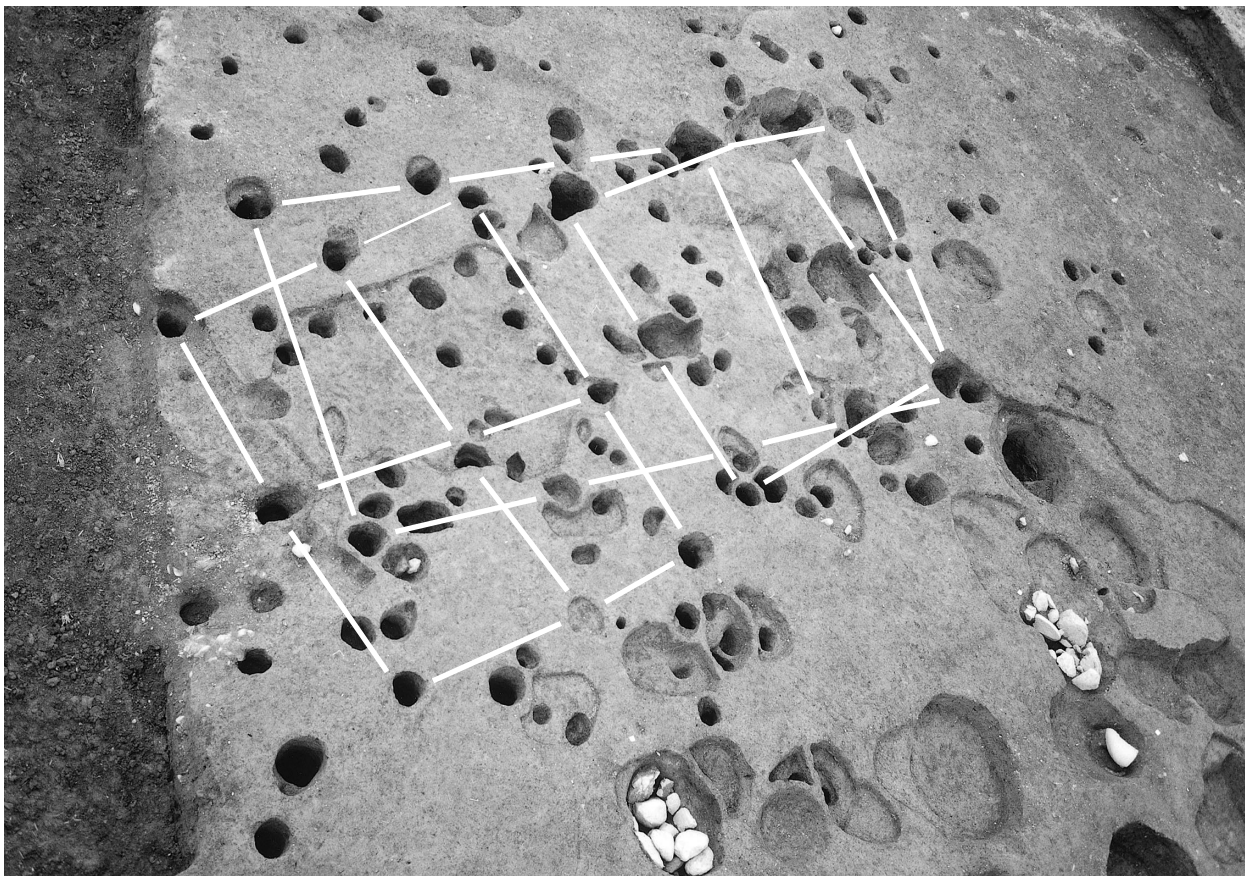
① 伊藤裕偉「楠ノ木遺跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第３分冊－』　三重県埋蔵文化財センター　1991年10月

調査前風景（西から）

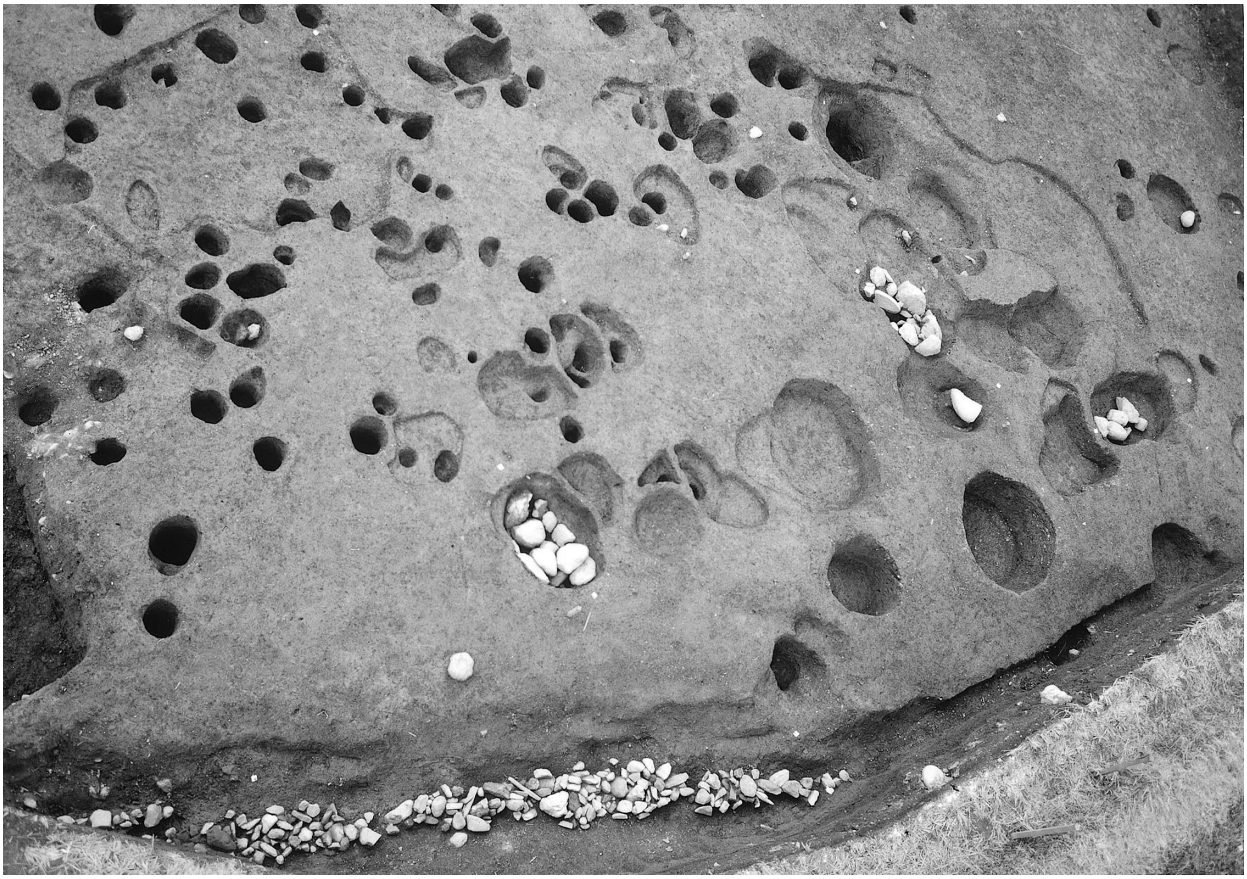


調査区遠景（西から）

調査区全景（北から）

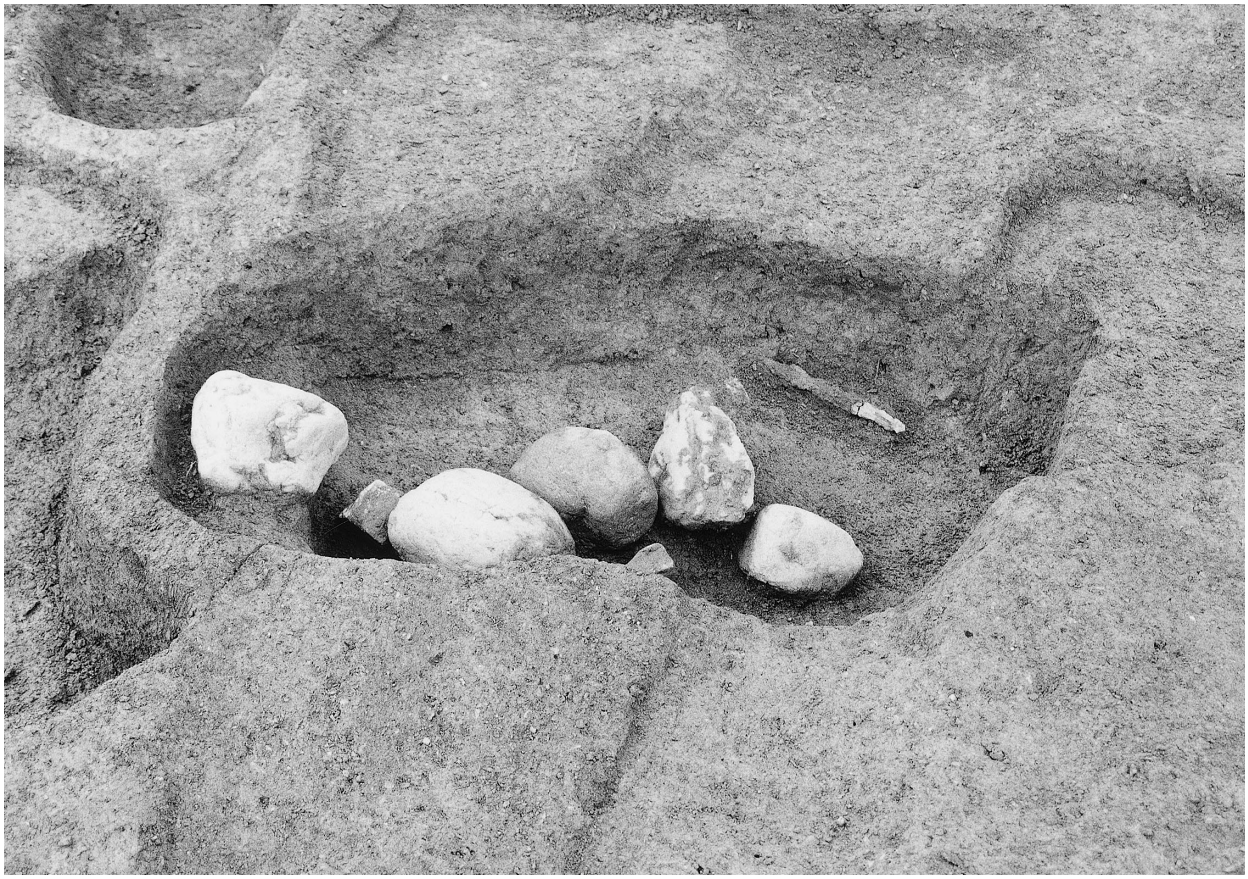


掘立柱建物（東から）

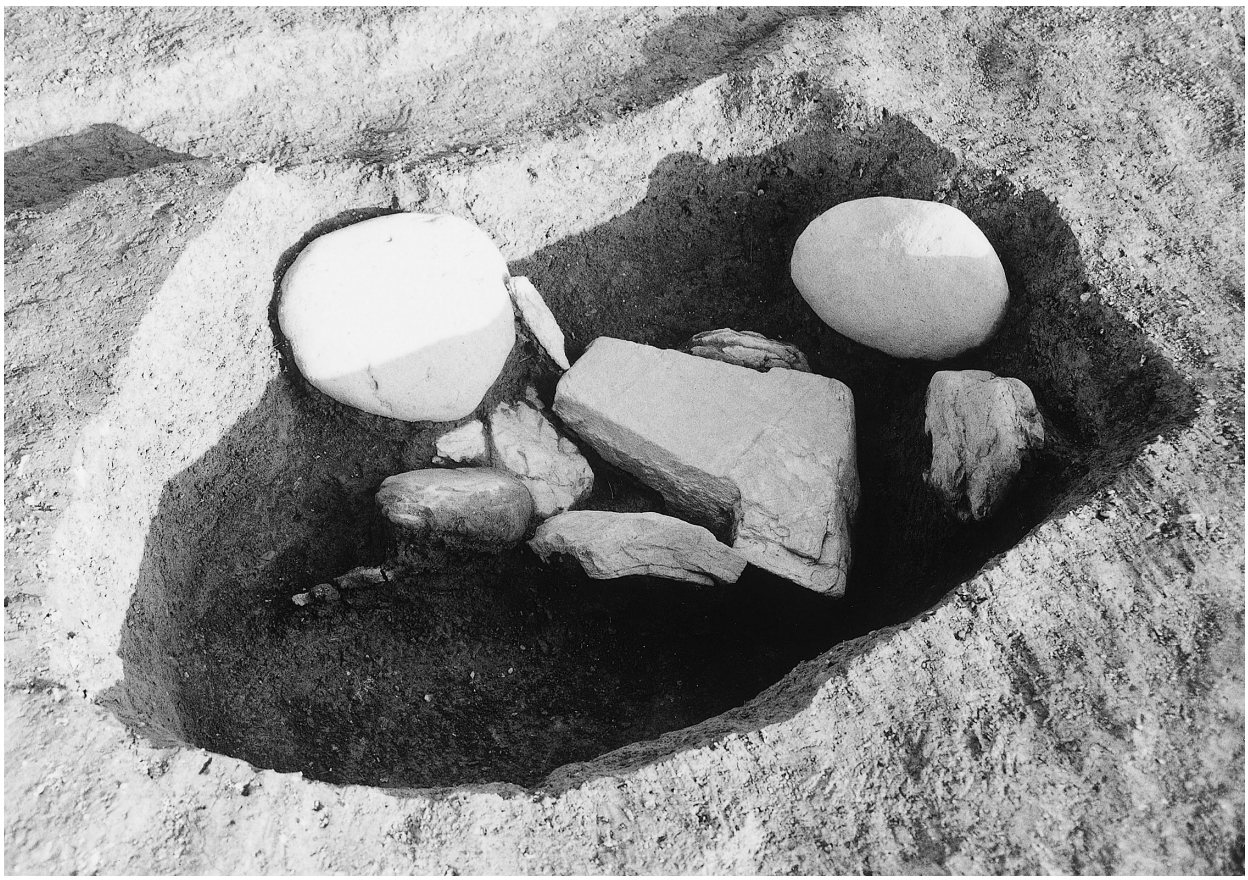


ＳＫ16・17・22・25、ＳＤ34等（東から）

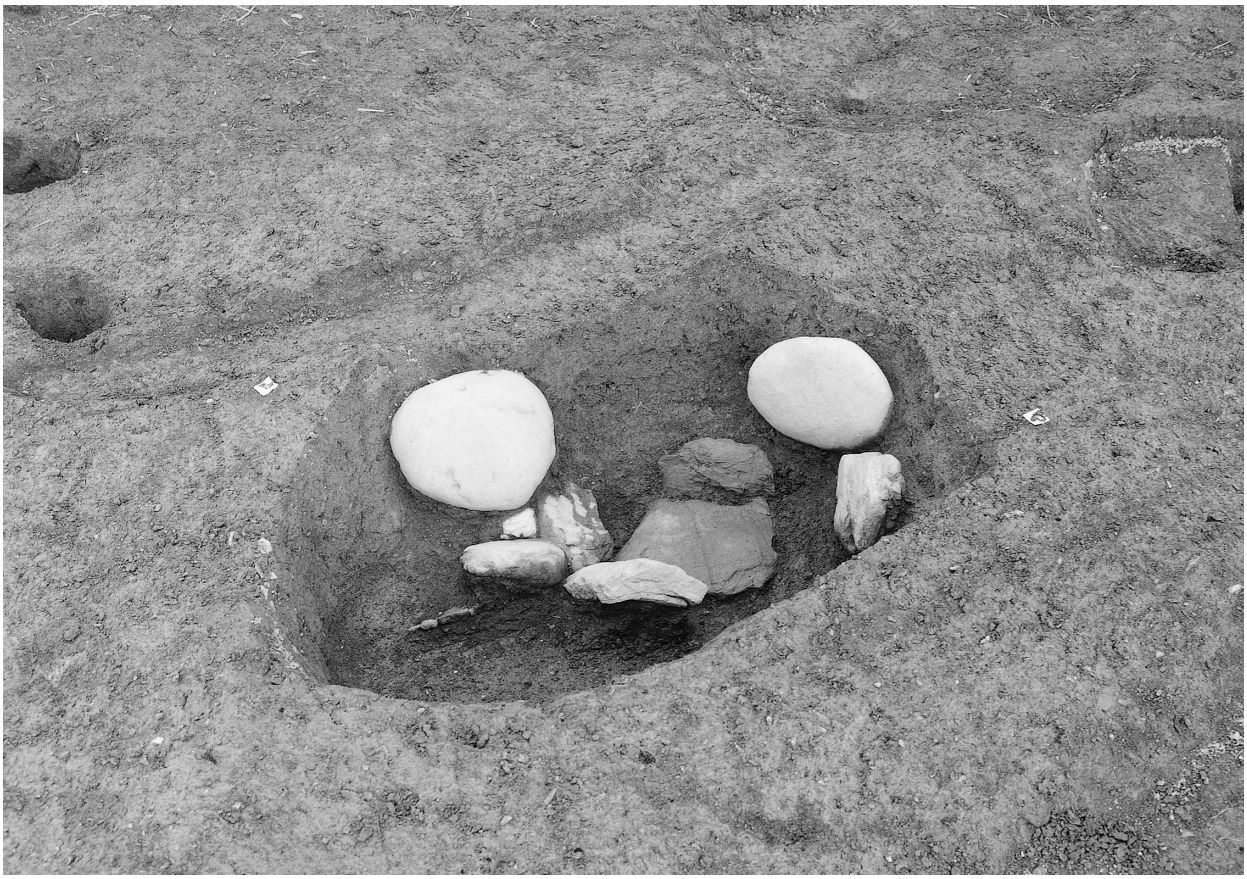
ＳＫ37・38・43・44・55等（東から）



ＳＫ16（東から）

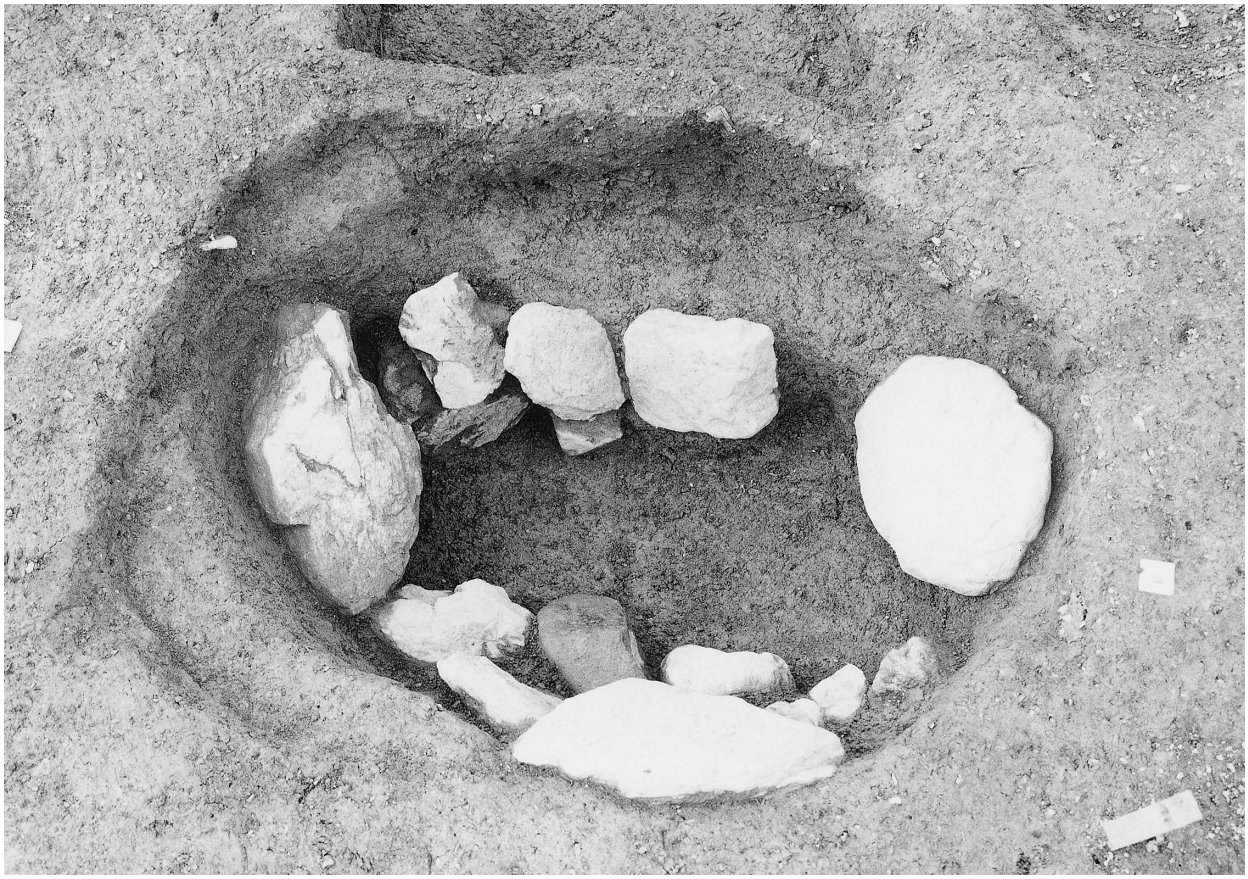


ＳＫ45　**転石除去前**（西から）

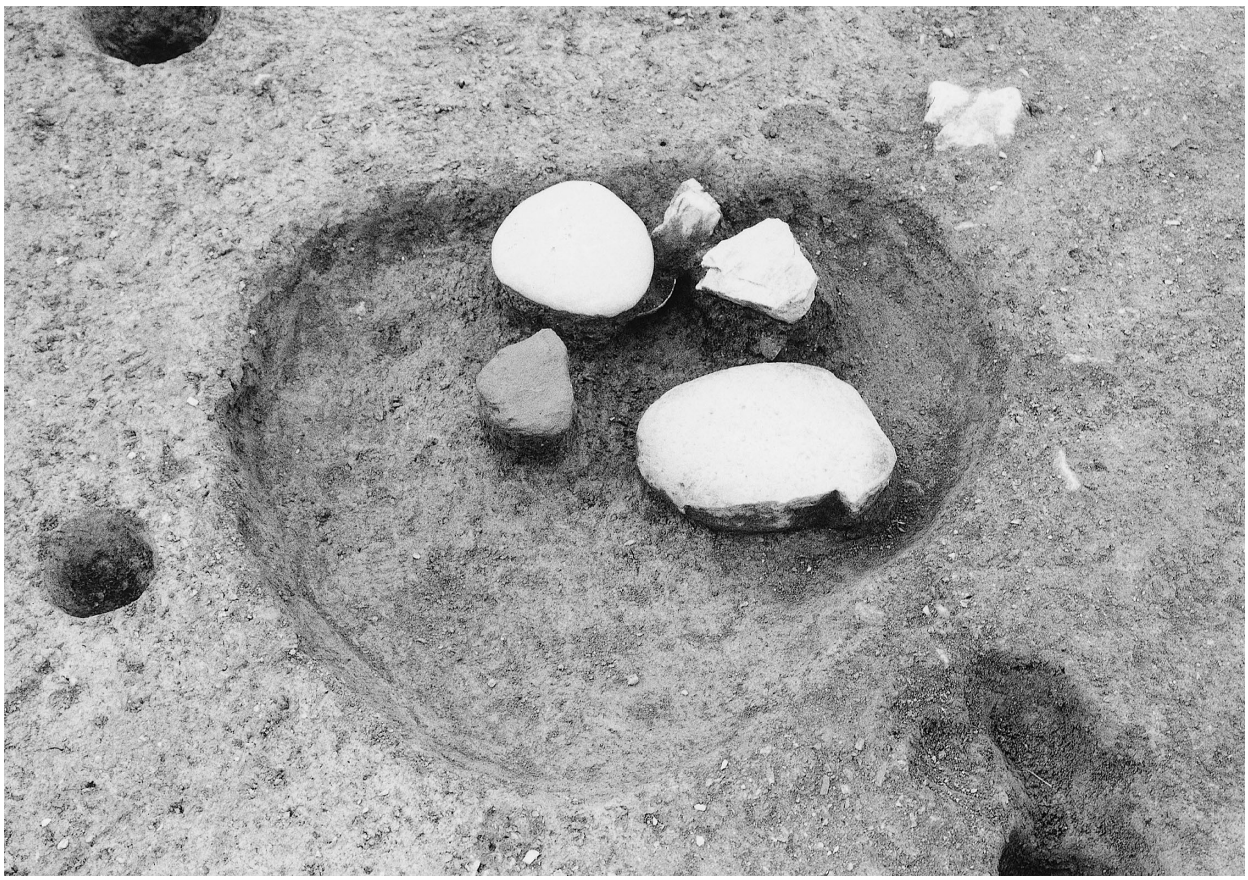


ＳＫ45　転石除去後（西から）

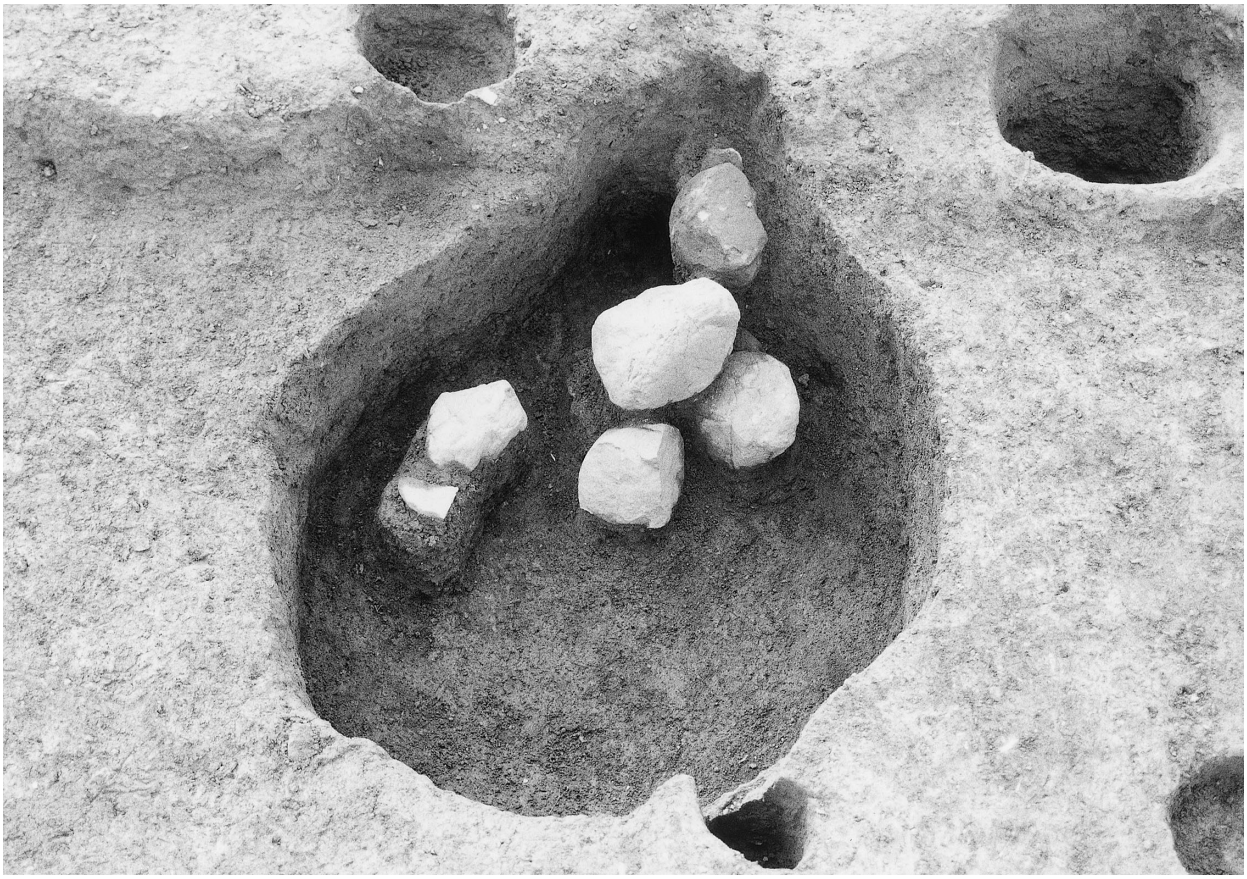
ＳＫ45　石室除去後（東から）



ＳＫ25（南から）



ＳＫ38（東から）



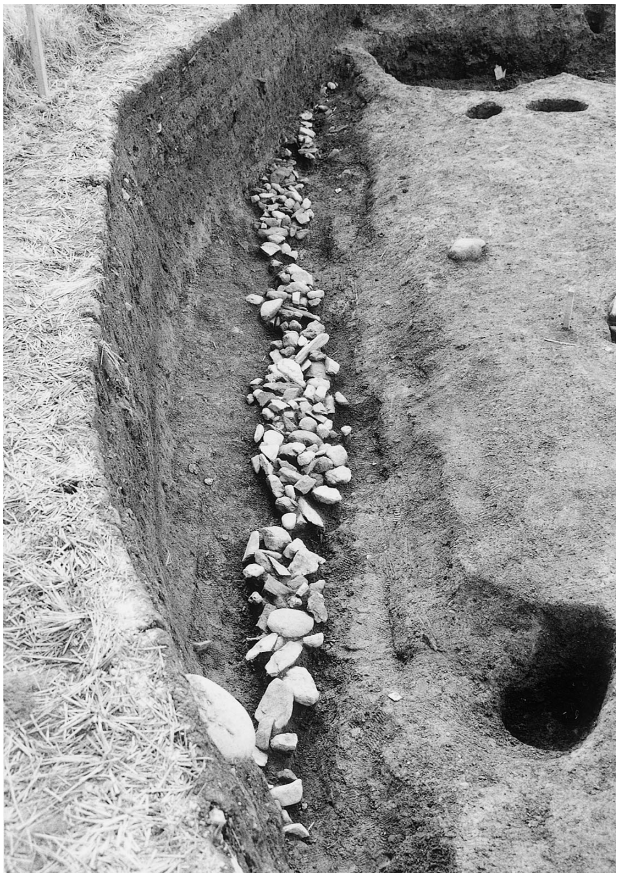
ＳＫ44（東から）

ＳＫ43（北から）

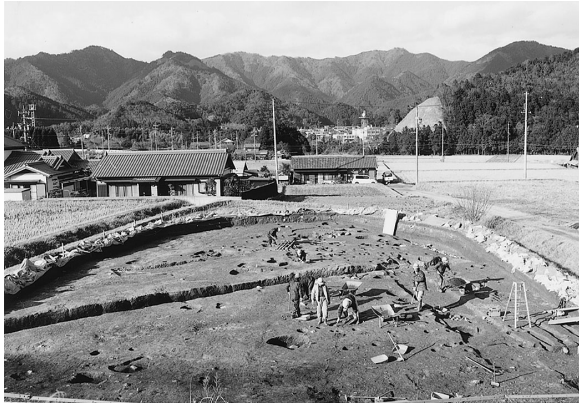
ＳＫ22　転石除去前、ＳＫ17（東から）

ＳＫ22　転石除去後、ＳＫ17（南から）

Ｄ５　pit10（西から）



ＳＤ34（北から）



調査風景（南から）

作業風景（西から）

P L 10

10

11

12

13

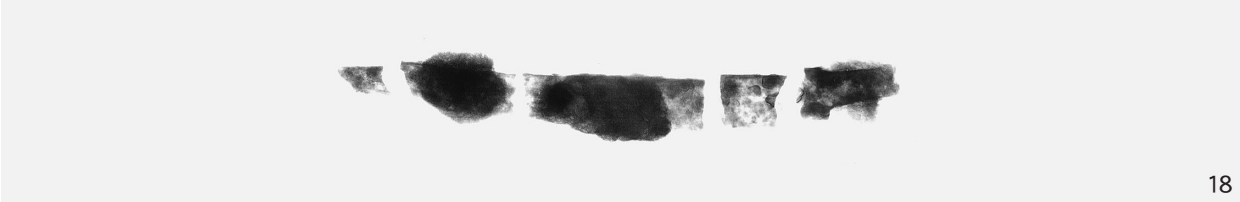
14

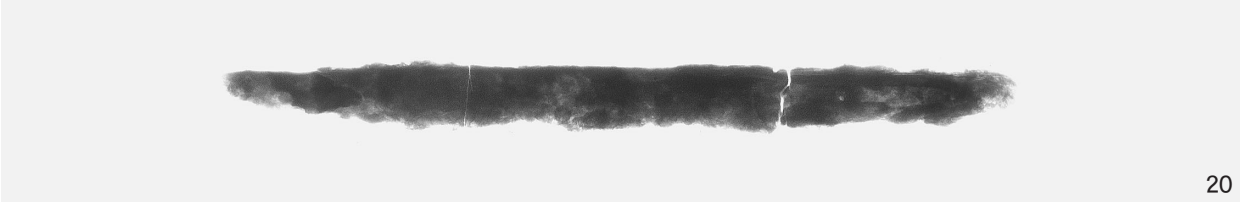
15

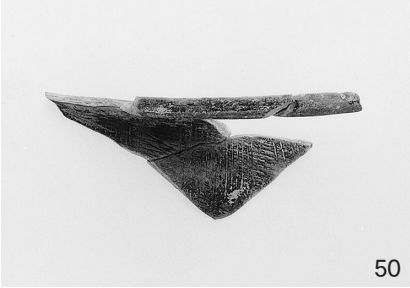
16

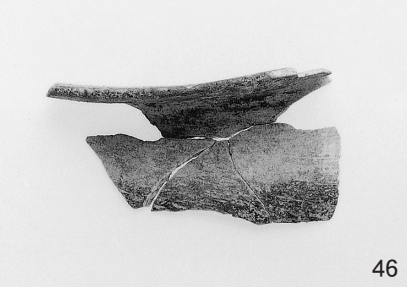
22

9


18


20


50


46

65

73

77

59

62

83

85

86

87

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひがしまえいせきはっくつちょうさほうこく
書名	東前遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２３８－２
編著者名	五嶋　史佳
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月	西暦　２００４年　３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひがしまえ いせき 東前遺跡	たきぐんおおだいちょう 多気郡大台町 すがあいあざかわい 菅合字川合	24443	未登録	34° 22′ 53″	136° 24′ 34″	20011210 ～ 20020214	702	近畿自動車道尾鷲勢和線（紀勢～勢和間）建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東前遺跡	集落跡	鎌倉～室町	掘立柱建物・土壙墓	土師器（皿、鍋、羽釜） 施釉陶器（天目茶椀、皿） 陶器（山茶椀、片口鉢、甕） 青磁（椀、皿） 銭貨	

三重県埋蔵文化財調査報告　238－2

東 前 遺 跡 発 掘 調 査 報 告

2004（平成16）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　㈲ 山 文 印 刷